

あま
海人フォーラム in 米子

古代日本海の文化交流

— 九州・山陰・北陸・信濃を結ぶもの —



妻木晩田遺跡から日本海を望む

2014年11月29日^土 10:10～16:40

- 会場 米子コンベンションセンター 小ホール
- 主催 伯耆の古代を考える会

開催内容

午前の部

10:10 主催者挨拶

西伯耆の海人関連神社と地名

伯耆の古代を考える会会長 坂田 友宏 氏

10:30 基調講演

日本古代の“海の民”

早稲田大学大学院教授 新川 登亀男 氏

……………(12:00～13:00 休憩)……………

午後の部

13:00 米子からの報告 I

古代における日野川流域の“海の民”

出雲弥生の森博物館 高橋 周 氏

13:40 九州からの報告

阿曇族の「復権」——本拠地からの最新報告

NPO志賀島歴史研究会 岡本 顕実 氏

14:10 長野からの報告

長野県松川村観松院の弥勒菩薩と安曇族

安曇族研究会会員 松本 猛 氏

14:40 米子からの報告 II

旅するオオナムチ——日本海を結ぶ神話の回廊

伯耆の古代を考える会会員 黒田 一正 氏

……………(15:10～15:25 休憩)……………

15:25～16:40

フォーラム「古代の“海の民”をめぐる」

(講師全員による意見交換)

16:40 閉 会

西伯耆の^{あま}海人関連神社と地名

— あいさつに代えて —



伯耆の古代を考える会会長 坂田 友宏

1935年米子市生まれ。東京教育大学（現筑波大学）卒業。

米子高専名誉教授、日本民俗学会評議員、山陰民俗学会理事、

伯耆文化研究会元会長などを務める。

著書『神・鬼・墓』（今井書店）『因伯民俗歳時記』『とっとり民俗文化論』（以上、伯耆文化研究会）他多数。

以前から海人、特に安（阿）曇族について研鑽を重ねてこられた志賀島歴史研究会（福岡市）や、安曇ゆかりの地との交流会実行委員会（安曇野市）の皆さんから、米子に安曇や宗像という地名が残っているというご縁で、安曇や宗像を共に語る仲間に入らないかというお誘いを受け、信州や博多での大会に出席していろいろ勉強させていただきました。そしてこの度その集まりを米子でお世話することになったわけです。もちろん我々の伯耆の古代を考える会は、この大会を皆さんに十分ご満足いただけるよう運営していくには無力ですが、会員一同、今日ご来場いただいた皆さん、特に信州や九州など、遠路御来訪いただいた方々を心から歓迎申し上げますとともに、この集いが今後ますます盛んになっていくように努力してまいりたいと思っております。

さて、古代を考える場合、古い地名や神社が有力な手掛かりを与えてくれることは周知のところですが、西伯耆の海人との関係が考えられるものとしては、次のような事例を挙げることができます。

- ①宗形神社（『神名帳』） 米子市宗像
- ②会見郡安曇郷（『和名抄』） 米子市安曇
- ③阿陀萱神社（祭神・阿陀萱奴志多岐喜比売命）
米子市橋本
- ④奈喜良 米子市奈喜良
- ⑤日野郡阿太郷（『和名抄』） 日野郡日南町印賀
付近
- ⑥樂々福神社 米子市上安曇ほか

このうち①②については以前からいろいろ話題になっておりますのでひとまず措くとして、ここでは③以下について、私の関心のままに若干のコメント

を申し上げて皆さんのご教示を仰ぎたいと思いません。

③の阿陀萱神社についての古い資料はありませんが、『出雲国風土記』所載の阿太加夜神社（松江市出雲郷）と社名・祭神とも共通しており、祭神の阿太加夜奴志多岐喜比売命のタキギは宗形女神のタキツと類似しており、いずれも潮流を神格化したものと解されます。タキギ姫の修飾語であるアタカヤヌシはアタ・カヤ・ヌシと分解できます。アタは⑤の阿太郷という地名とともに、薩摩半島の阿多郡阿多郷（『和名抄』）との関係が考えられます。カヤ、ヌシはいずれも貴人という意味だと愚考しています。

④のナギラも海流と関係ありそうです。現地をみますと、ここは阿陀萱神社の鎮座する丘陵から西、昔は海だったといわれる低地を走る国道181号線を挟んだ丘陵部に位置しており、昔舟をつないだという舟つなぎの松の記念碑が残っています。また『延喜式神名帳』にみえる奈伎良比売命神社（隠岐国海部郡一現隠岐郡海人町豊田）の存在も参考になると思います。

⑤では伯耆の日野郡阿太郷と薩摩の阿多郡阿多郷との交流を考えようというわけですが、これを仮に南九州の海人であるアタ族の移動と考えますと、その足跡は前記以外にも山陰から北陸にかけての日本海沿岸に連続して分布していることがわかります。主な事例を挙げてみますと、

- 加毛利神社（『神名帳』）島根県簸川郡斐川町神氷神守
- 阿太賀都健御熊命神社（『神名帳』）鳥取市御熊
- 籠神社（祭神・彦火明命）京都府宮津市大垣

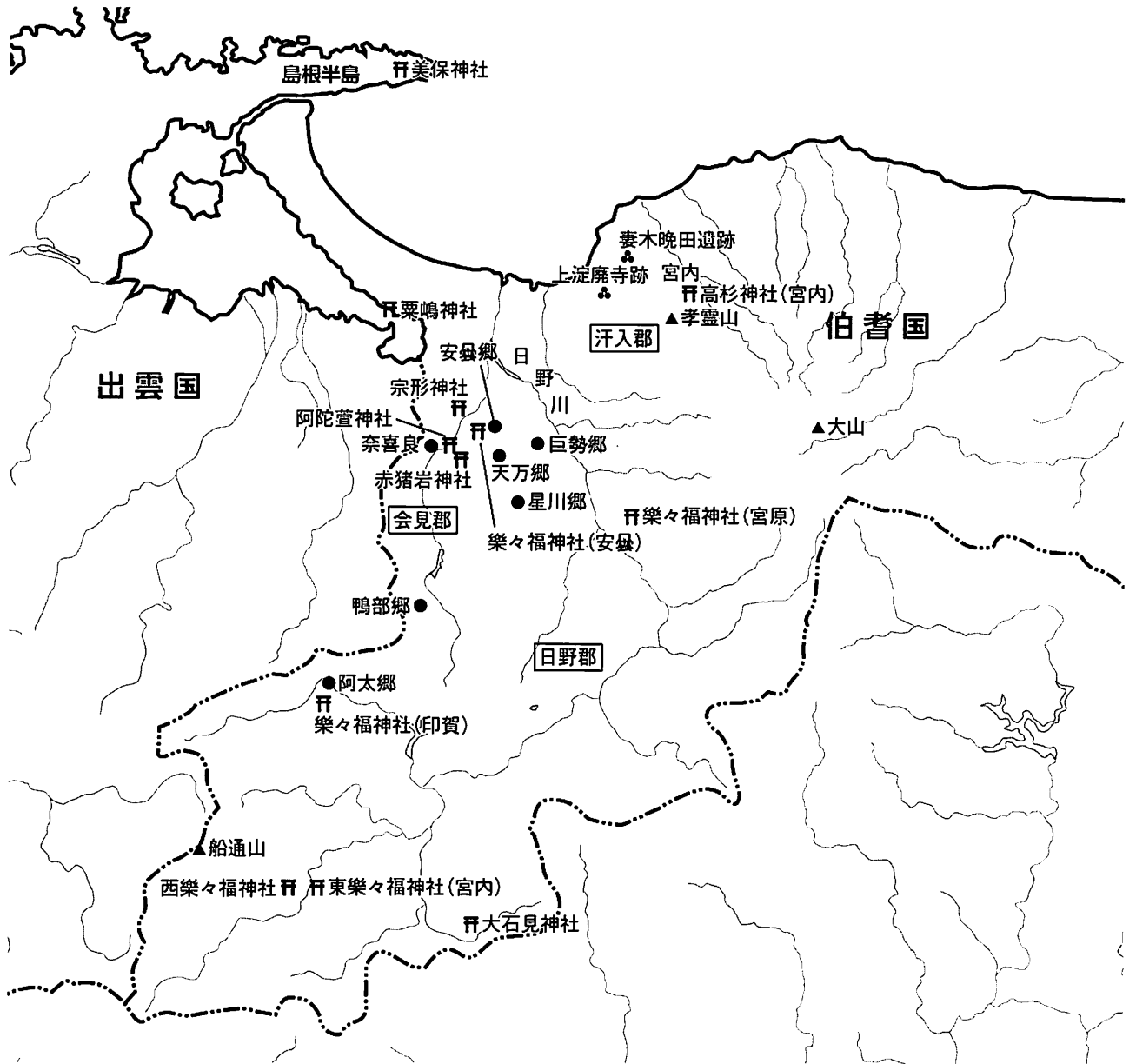


図1 西伯耆の海人関連神社・地名分布図

●久麻加夫都阿良加志比古神社（「神名帳」）石川
県能登中島町宮ノ前

加毛利神社は、蟹守の子孫が、ヒコホホデミ、トヨタマヒメ、ウガウアスキアエズの日向から生まれた三神の分霊を奉じて、日向の宮崎神宮から船で当地の船子山に着き祭り始めた、と伝えています。

阿太賀都健御熊命神社のアタ・カツはアタ・カヤと同義で、カツは優れた人という意だと考えています。

籠神社の祭神ホアカリも日向神話から生まれた神であります。

久麻加夫都阿良加志比古神社についての検討は多少煩雑ですが、まず「久麻加夫都」と「阿良加志比

古」に分解します。「久麻加夫都」は仮名訓みではクマカブツとなります。クマをコマ（高麗）の訛りとする向きもありますが、そうではなく、熊襲のクマ（＝隼人、阿多）との関係を考える方がベターだと思います。また国史大系本『延喜式』がこれにクマカツというルビを振っているのが注目されます。これについては、鹿児島辺の方言ではカブ（加夫）はカツという促音便に変化するというのが参考になります。そしてこの場合のツ（都）は捨て仮名で、「加不」の最後の音はツであることを指示したものとということになります。つまりクマカツもアタカヤやアタカツと同義語ということになるわけです。次の「阿良加志比古」はアタカシ彦の訛りとも考えられ、コ

ノハナサクヤ姫の別名アタカシツ姫(吾田鹿葦津姫)との対象関係が興味をそそります。

⑥の樂々福神社は西伯耆の日野川流域に広く分布する産鉄神で、樂々(ササ)は砂鉄を意味しています。日立金属の資料によれば、中国地方の古代製鉄遺跡において使用原料に砂鉄を用いているのは、西伯耆から出雲東部の海岸寄りの地域にほぼ限られており、これはその技法の伝来経路を示唆しているようにも思われます。米子市上安曇にも樂々福神社がありますが、ここには奈良時代に戸主・安曇某が居住しており、また1キロほど離れた古代会見郡の郡衙跡に擬せられている長者原は、もともと^{あま}海氏を名

乗る豪族・紀氏の拠点だったと思われます。あるいは安曇氏と海氏は同族だったかもしれません。また上安曇は日野川流域のササフク信仰の出発点だった可能性を指摘することができます。

砂鉄精錬(タタラ)の技術が海人によってもたらされたとすると、初期的にはおそらく浜砂鉄を用いたと思われますが、そうすると浜砂鉄の産地として、種子島・南九州から筑前の博多湾周辺を経て、伯耆・出雲に至る、スケールの大きい交流のルートを予想しなければならないと思います。

以上はなはだ独りよがりのコメントになりましたが、ご指導を戴ければ幸いです。

西伯耆の神社紹介①



写真1 延喜式内社 宗形神社

鎮座地=米子市宗像 祭神=多紀理比賣神・多岐津比賣神・市杵島比賣神



写真2 樂々福神社(印賀)

鎮座地=日野郡日南町印賀 祭神=媛姫命・素盞鳴命ほか



写真3 阿陀萱神社

鎮座地=米子市橋本 祭神=阿陀加夜奴志多岐喜比賣神・多紀理姫命ほか



写真4 樂々福神社(宮原)

鎮座地=西伯郡伯耆町宮原 祭神=大日本根子彦太瓊尊・大日靈貴命ほか

日本古代の“海の民”



早稲田大学文学学術院教授 新川 登亀男

1947年広島市生まれ。1975年早稲田大学大学院博士課程中途退学。

大分大学講師、日本女子大学助教授、早稲田大学教授を経て、現職。

専攻 日本古代史、アジア地域文化学。

著者『上宮聖徳太子伝補闕記の研究』（吉川弘文館）、『日本古代史を生きた人々』（大修館書店）他多数。

I 食を担う“海の民” ～はじめに～

海や河川あるいは湖で生業を営む人々（“海の民”と仮称するが、淡水の民も加える）が、歴史上、きわめて重要な役割を担っていたことは言うまでもない。これらの人々は、生活の基盤となる衣食住のうちの食である水産物を確保・加工し、広く供給していたからである。以下、食を担う“海の民”について考えてみたい。

II 消えていく“海”の「サト」

古代の“海の民”が住むところを行政単位でみれば、ただちに「海部」郡・郷（大里）・里（小里）が思い浮かぶ。ところが、この行政単位には特徴的な変化がみられる。

たとえば、天平8年（736）の平城京木簡に「因幡国巨濃郡□海」（巨濃はコノ）と書かれたものがある。ここにみえる「□海」が郷名であったとすれば、そのような郷を10世紀前半の「和名抄」は記載していない。つまり、消えたのである。このように消滅した郷には、伊予国和氣郡や宇和郡の海部郷、讃岐国山田郡の海郷などがある。いずれも、海産物や塩を貢進していたところである（平城宮・京木簡）。もちろん、消えない郷もあるが、筑前国怡土郡、那珂郡、宗像郡の海部郷などは、「和名抄」以外の記録にはおよそ登場することがない。

このように、海部郷が消えていく現象が生じているのはなぜか。まず、郷（大里）の人口は1,000人前後が多い（新川登亀男『日本古代を生きた人々』大修館書店、2007年）。もし、“海の民”がまとまって生活する場合、到底1,000人前後には及ばなかった可能性がある。また、農耕生活と異なり、人口を

増やす条件や環境が整っていなかったことも考えられる。ついで、“海の民”の生活や生業が移動性をともなうものであり、大地への土着性が薄いことに起因するからでもあろう。要するに、行政単位のなかに“海の民”を拘束しておくことの困難さを読み取ることができる。

その複雑な展開を物語る例がある。それは、「紀伊国海部郡□里木本村海部宇手調」と記された藤原京木簡と、「木本村御贄□（鯛カ）」と記された平城京木簡である。

これに加えて、紀伊国「海部郡木本郷」に複数の墾田を保有していたとする天平19年（747）の「大安寺伽藍縁起并流記資財帳」がある。そして、「木本郷」の消滅を伝える「和名抄」へと行きつく。一体、「木本」地域をめぐる変転は、何を物語っているのだろうか。

まず、海産物を貢納する海部集団の拠点として「木本村」が設定されていた。「村」は、古代の公的な行政単位ではないが、一応、8世紀初めには海部郡某里のもとにおかれ、あるいはそれに付属させられていた。言い換えれば、流動性に富むが、結束の固い小規模な海部集団の生業形態を尊重しつつ、何とか土地に拘束しておこうとした証しが、「村」という特別な、例外的な行政単位を生んだのである。

やがて、この「村」は、正規の「郷」として昇格し、認知されたかのようなのである。それは、墾田開発による稲作民化や稲作民導入と引き換えであったと思われる。ところが、この政策がすすむにつれて、「木本郷」そのものが消えていった。それは、開発がうまく進行しなかったためなのか、他の「郷」に吸収されたのであろう。

Ⅲ 消える“海”の字

さらに、郷（里）名の用字変化も注目される。たとえば、8世紀初めには「因幡国海郡」が存在していた（神亀3年山背国愛宕郡雲上里計帳）。この「海郡」は、二文字の好字採用指示にもとづいて「邑美（オフミ）郡」（法美郡が隣接）に改称されたものと思われる（「邑美郷」もある）。実は、これに似た例が播磨国明石郡「邑美郷」（和名抄）の場合にもみられる。「風土記」託賀郡によると、明石郡の「邑美郷」は、かつて「大海里」と言われていたようであり、その里人が加古川を上って内陸部の託賀郡に移住したのだという。「大海里」から「邑美郷」への改称は、おそらく、このような里人の移動とかわりがあるだろう。

まず、“海の民”を「邑」（ムラ）単位で把握できるように定住化を促し、自覚させる意図がうかがえる。ついで、もっぱら「海」に依存する小規模型の流動的な生業形態に改編を迫り、時に解体を誘導させる意図がうかがえる。つまり、可能な限り、あるいは建前上、“海の民”を稲作民化させ、班田収授や調庸制、編戸籍制などを介して土地に結び付け、常に行財政機関が把握しやすいようにしたいということなのである。同時に、人口を増やして農耕生産力と生産量を高めようとしたのでもあろう。

これと類似の例は、安曇集団にもみられる。摂津難波を基点として瀬戸内海を往還していた安曇集団のなかには、播磨国揖保郡「石海里」の地（揖保川流域）で墾田（稲作）開発をおこなった人々がいる。「風土記」によると、天皇の命によるというから、ある程度強制的なものであり、のち「和名抄」にも「石見郷」として登録され続けた。「海」は「見」の字に変換されたのである。

Ⅳ 消えない“海”の「サト」

ところが、消えていく“海の民”の行政単位とは反対に、“海の民”の行政単位を遵守し続けたところが存在する。その好例は、何と云っても隠岐国（隠岐諸島）である。「和名抄」は、知夫利（チフリ）・海部（アマ）・周吉（スキ）・隠地（エチ）の四郡を載せるが、この行政分割は、天武朝（672～686）の評・五十戸制のもとで既におこなわれていた（たとえば、

海評海里（五十戸）⇒海部郡海部郷）。

この島々の人たちは、ながく海産物（海藻・軍布、鰻、烏賊など）の貢納に終始していた。しかも、それは、海評海里（五十戸）の地（道前の海士町：アマチヨウ付近）の人々に限定されることなく、全諸島の人々が貢納しており、「海部」姓や「阿曇部」姓を称する者とは限らない。「日下部」姓その他があり、早期には、無姓（ウジ名がない）の者もいた。むしろ、7世紀の評制段階には、「海部」姓や「阿曇部」姓を称する者が海産物貢納をおこなったという痕跡がないのである。ただし、8世紀になると、郡司層として「海部」姓や「阿曇部」姓の者が台頭してくる（郡稲帳・正税帳）。

要するに、隠岐諸島では、まずもって全諸島あがての海産物貢納体制が人為的に構築された。それは、優良な海産物が豊富であることにもよろうが、そもそも、諸島の人々が大きく移動することなく、また、生業の変化をもたらすことのない、ある種安定した環境に関心が集まったからであろう。「海部」姓や「阿曇部」姓の確定および編成は、海産物の貢納・運輸過程のなかで、むしろ後次的に成り立った可能性があるだろう。

Ⅴ 見えにくい伯耆国の“海の民”

では、伯耆国における“海の民”はどうか。まず、“海の民”の集住を示唆するのは、会見郡の安曇郷と胸形神社であるが、海部郡（郷・里）は存在しない。しかし、既述の「邑美」や「石見」の「美」「見」が「海」に由来するとすれば、「相見」とも表記された「会見」（アフミ）の「見」も、本来は「海」の字や意であった可能性が出てこようか。

ところが、かりにそうであったとしても、当の会見郡に安曇部・海部・宗形部などの“海の民”系集団が濃密に展開し、広く活動し続けていた痕跡は明確でない。「和名抄」は、会見郡に12郷があったとし、そのなかのひとつが会見郷であり、安曇郷である。しかも、安曇郷の住人で知られるのは「間人安曇□」という戸主であり、「調狭繩（サキアシギヌ）」の貢進者であって（正倉院調布銘）、狭義の“海の民”が海産物を納めたわけではない。また、他の郷名からみて、郡内では日下部、巨勢部、鴨部（賀茂部：優婆塞貢進解にあり）らの生活も推測でき、天万（テ

マ) 郷には刑部集団がいた(正倉院文書)。

このように、会見郡は、さまざまな集団を編制して作られている。しかし、そのなかに“海の民”系集団がいなかったというわけではなく、さきの「間人安曇□」の「安曇」という名に、そのわずかな痕跡がうかがえよう。しかし、その痕跡が稀薄であるのは、やはり、消えていく、あるいは見えにくくなる“海”の「サト」の一例と言える。

VI 伯耆国の海産物貢進

ところが、伯耆国は、海産物を貢進していた。10世紀の『延喜式』主計上には、中男作物として鮎(フグ)皮、煮乾年魚、雜腊(クサグサノキタヒ)を貢進するとある。鮎皮の貢進は、山陰道(但馬・因幡)の特徴であり、出雲国でも島根郡・秋鹿郡の北海で鮎が獲れた(風土記。日本書紀斉明4年長歳条参照)。さらに、伯耆国は、内膳司に釋海藻(ワカメ)・海藻根(メカブ)を贄として納めるという(『延喜式』)。

このような伯耆国からの海産物貢進は、8世紀の平城宮・京木簡からも確認できる。それは、およそ三種類に分かれる。

第一は、もっとも多くの点数を残す河村郡屈賀(笏賀)郷の「大贄」「海藻御贄」「若海藻御贄」であり、ワカメの類である。なお、伯耆国のことを記した最古類の藤原宮木簡は戊戌年(698)のものであり、「波伯吉国川村評久豆賀里」とあるが、「久豆賀」は屈賀(笏賀)のことである。この木簡も、贄の貢進札であった可能性がある。

第二は、汗入(アセリ)郡尺刀郷の中男作物である「腊」が天平17年(745)10月に貢進されている。また、相見郡巨勢郷の「雜腊」が養老某年(717~24)10月に貢進された。この「腊」とは、臍物を出さずに小魚を丸干しにしたものである(関根真隆『奈良朝食生活の研究』吉川弘文館、1969年)。

第三は、「鮭」を進上した木簡が2点ほど知られている。1点には「鮭御贄雄須」とある。ただし、この鮭が、伯耆国内のどの地域(河川など)で捕獲されたものかは示されていない。

VII 伯耆国のクツガの海

以上、伯耆国の海産物貢進木簡を概観すると、次のようなことが分かる。(1) 鮭の貢進を除いて、

他は『延喜式』の規定にそのまま継承されている。(2) 贄として評価の高いワカメの特産地は、河村郡屈賀(笏賀)郷である。(3) ただし、その木簡の特徴は、ワカメを貢進する屈賀(笏賀)郷という納税行政単位にこだわるのではなく、ワカメの採取場所としての「屈賀」や「屈賀前」を言うのである。「前」とは、屈賀のミサキ(岬)のことであり、屈賀のマエの海をさす。「屈賀」と記して「郷」の字を欠くのも、同様の意味があろう。(4) つまり、ワカメは、あくまで「屈賀」(クツガ)の前の海で採取され、伯耆国として貢進するという現実があったのである。(5) 言い換えれば、海には郷のような土地の境界がなく、ワカメを採取する人々も伯耆国内の近隣郷から集まってきた可能性がある。

この点、参考になるのは、大阪湾沿岸の例である。すなわち、摂津国「御津村」と呼ばれるところに、数多くの「廬舎」(ひとつの廬舎に平均5人が居住)が作られており、そこに「海浜居民」が集まっていた。この「御津村」は、さきにみた紀伊国の「木本村」と同じように非制度的な単位であり、逆に現実的な集合体である。「廬舎」も「宇」(棟数)ではなく、「区」と呼ばれていた(続日本紀天平勝宝5年9月壬寅条)。このような「廬舎」は、「難波の小江(ヲエ)」の「廬」とも呼ばれ、その「廬」を出入りする「海浜居民」は、区域外の人々からは「葦蟹」(アシガニ)にたとえられた(万葉集16の3886)。また、このような「廬舎」は、「渚のとまや」「浦の苦屋」「蟹(アマ)の苦屋」などとも言われている(新川『日本古代を生きた人々』)。

いわゆるクツガの海のワカメは、このような「海浜居民」が「廬舎」(苦屋)を作って採取したものであろう。それは、クツガ郷(民)としてではなく、それに付随した非制度的な「区」域、つまり「村」とも呼べるような集合体によるものである。ために、制度的な持続性がつかみにくい。強いて言えば、クツガ郷に吸収されて、見えにくくなっていったのである。それにともない、狭義の“海の民”と、そうでない人々との混在が生じてきたものと思われる。

VIII 鮭の文化圏

クツガの海の西方に位置する汗入郡尺刀郷や相見(会見)郡巨勢郷からは、さまざまな小魚の丸干し

が貢進された。これは、際立った特産というわけではなく、加工物でもあるので、新鮮さはみられない。価値も、それに見合ったものであろう。

そこで、つぎに着目したいのは、鮭の捕獲である。件の鮭は伯耆国単位で進上されており、どこで捕獲されたものかは分からない。これを逆にみれば、郡郷（民も含む）をこえた河川で獲られたからであろうか。

そもそも、鮭という漢字は、本来、フグをさすようであるが、日本では早くから、今日のサケを意味した。『延喜式』主計上には、鮭を調・庸・中男作物として貢進する諸国がみえる。すなわち、信濃国は鮭の楚割（スハヤリ・スワリ：内臓を除いた乾燥体か）・氷頭（ヒツ：頭の軟骨）・背腸（セハタ：部位の塩辛か）・子（筋子・イクラ、あるいは鮭児：ケイジ）を、越中国はこれに加えて鮭鮓（スシ）を、越後国は鮭と鮭の内子（ココモリ）・子・氷頭・背腸を貢進するという（仙台藩伊達屋敷の東京汐留遺跡木簡には「仙台子こもり鮭」とある）。

しかし、鮭（加工品を含む）の貢進国は、これだけに限らない。同じ『延喜式』宮内省によると、内裏に直接納める鮭を「諸国例貢御贄」と呼び、その諸国とは、信濃（楚割鮭）・若狭（生鮭）・越前（鮭子）・丹後（生鮭）・但馬（生鮭）である。また、同内膳司によると、これに加えて越後（楚割鮭）・丹波（生鮭）・因幡（生鮭）の諸国からも鮭が贄殿へ進納されていた。また、延喜14年8月の太政官符では、加賀国（越前国から分割）が鮭と鮭児を、越中国が児鮭（鮭児）と楚割鮭を貢進していたとされる。

以上は、『延喜式』や同時期の太政官符に記載された鮭の貢進国である。それは、北陸道と山陰道の日本海側諸国に集中するが、東山道の信濃国がこれに加わる。

たしかに、これらの範囲での鮭貢納は、他の史資料からも確認できる。新潟県（越後国）の的場遺跡（新潟市）・八幡林遺跡（和島村）の木簡には鮭（鮭・特内子鮭）の捕獲を示したものがある。また、越後国の瀬波（セナミ）河（村上市三面〈ミオモテ〉川）はとくに国領とされ、鮭漁がさかんであった（長寛3年正月の越後国司庁宣案）。さらに北上した秋田県弘田柵からも鮭の木簡が出ている（東山道出羽国）。しかし、保延6年（1140）8月3日の官宣旨

写は、近年、越中国で鮭がとれなくなったともいう。なお、信濃国の場合は、埴科郡から御贄の鮭を貢進した木簡が平城京から出土している。

ついで、山陰道では、浦島子伝承や「海部氏系図」を伝える丹後国与謝郡とその与謝川で獲れた鮭（鮮鮭・雄腹・雌腹）を御贄として貢進した平城京木簡がある。因幡国からは、やはり御贄として鮮鮭（雄栖）を貢進した天平8年（736）10月付の平城京木簡が知られている。さらに、既述のように伯耆国からも、御贄として鮭（雄須）が貢進されていた。これに加えて、『出雲国風土記』出雲郡・神門郡は、ともに神門の水海（ミズウミ）に注ぐ出雲大川・神門川で鮭が捕獲できるという。ちなみに、西海道でも、福岡県嘉麻市には稀有な鮭神社があり、芦屋（葦屋）の海から遠賀川を上ってくる鮭を祭るとされる（谷川健一責任編集『鮭・鱒の民俗』三一書房、1996年）。

このように、日本海側の長い地域が鮭の文化圏であり、伯耆国も例外ではなかったが、それは諸道の区別をこえる性格をもつ。しかし、これに内陸地の信濃国が加わるが、さらに、太平洋側の北部も鮭の捕獲がみられる。まず、『常陸国風土記』久慈郡の助川は、鮭を取る河川として命名されたものだという（鮭はスケともいう）。ついで、大治5年（1130）6月11日の下総権介平経繁私領寄進状案などによると、下総国相馬郡布施郷の私領地から「土産鮭」（塩曳鮭）が伊勢神宮の供祭物として送られることになったという。

以上、古代の史資料から確認される鮭の捕獲地は、後世においても基本的な変化はみられない。ただ、平安時代になると、日本海側でも鮭の捕獲は因幡国を西限としたもようであり、伯耆・出雲両国では鮭漁が衰退した可能性がある。ただ、福岡県の遠賀川下流では、20世紀後半にも鮭が獲れたというから、例外や盛衰はあろう。その原因が、自然環境の変化によるものか、人為的な条件によるものかは定かでない。

IX 日本海が結ぶ生業 ～おわりに～

鮭の文化圏は、日本海が結ぶ生業の代表例である。それは同時に、海と河川を結ぶ生業の好例でもあった。内陸地でありながら、信濃国で鮭漁が盛んであったのは、まさに日本海に注ぐ千曲川・犀川・姫川水

系があるからである。近代に至るまで、長野県ではこの水系で鮭漁がおこなわれていたのであり、古代の木簡で確認できる埴科郡はもとより、安曇部が集中する安曇郡前科郷（正倉院調布銘）も、この水系を共有している。しかし、その安曇部は、伯耆国会見郡安曇郷の間人安曇□と同じように調布を貢納する民であり、天平宝字8年（764）年10月段階の彼らは、もはや狭義の“海の民”であることはなかった。

では、伯耆国の鮭はどこで捕獲したのだろうか。その手掛かりになる研究が木村圭一「アイヌ地名から見た古代日本の鮭の分布」（『東北地理』6の3、1954年。前掲『鮭・鱒の民俗』所収）である。この研究は、アイヌと鮭漁の密接な関係を踏まえ、鮭をさすアイヌ語（チュク・キク・ツク・シク・スクその他）に由来するとみられる地名の分布を調査したものである。たしかに、その地名と鮭漁地域（河川）とは符合するところが多い。

この調査研究によると、伯耆国では、かのクツガの海に注ぐ天神川水系が浮上してくる。つまり、「クツガ」を「ツク」とみたのである。もし、この調査に準拠するならば、クツガの海（天神川水系）は、優良なワカメの採取地であるのみならず、鮭漁とも密接な関係にあったことになる。

一方、西方の国会見郡安曇郷・胸形神社の地域には、このような地名の手掛かりは確認できていない。日野川水系と鮭の関係が気になるところである。ただ、既述の福岡県遠賀川に鮭が上るとしたら、筑前国遠賀郡宗像郷の存在（疑問視説もある）との関係も考慮されようか。

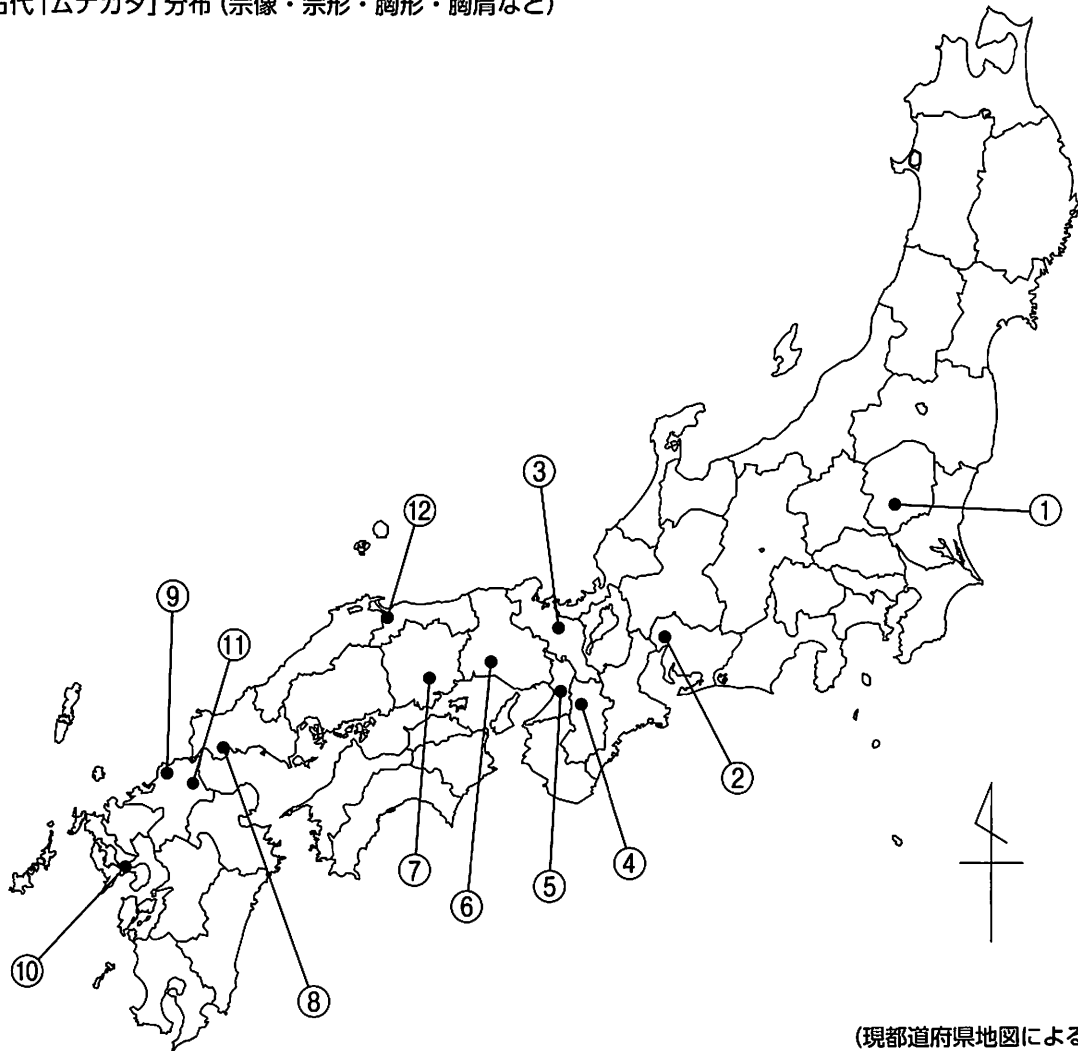
以上、今後、検討されるべきことは多いが、鮭の文化圏が日本海を結ぶ人々の生業を掘り起こす有力な手掛かりになることは間違いない。内陸地の信濃国の鮭漁に留意すれば、さらに、日本海と河川とを結ぶ“海の民”（アズミ・ムナカタ・アマ集団）の定住化や変容に理解が深まるであろう。

ここで最後に、諸道をこえて日本海で結ばれる人々の動きについて触れておきたい。まず、天平6年（734）7月、筑紫大宰府から山陰道諸国に符が発せられた（出雲国計会帳）。その趣旨は、大宰府の柁師生部勝麻呂ら4名が越前国に向かうという通達である。これによると、大宰府の柁師たちは、山陰道から北陸道へと移動したことになる。

ついで、逆の移動もある。すなわち、斉明7年（661）、阿倍比羅夫や阿曇比羅夫らを将軍に任じて、百濟復興・救援の軍が編成され、朝鮮半島への渡海をめざした（日本書紀）。阿倍比羅夫は、それまで船団を率いて日本海側を北上し、蝦夷や肅慎対策にあたっていた。したがって、その船団（あるいは一部か）が、そのまま日本海を移動して博多湾に入ったものと思われる。これに阿曇集団も合流したのであろう。

いずれにせよ、七道は、宮都と諸国を別々に結ぶ中央集権主義の産物であり、分割統治のための人為的な陸路である。しかし、そのような中央集権的な企図に拘束されない歴史の実態や基層が、日本海と河川を通じてみえてくるのである。

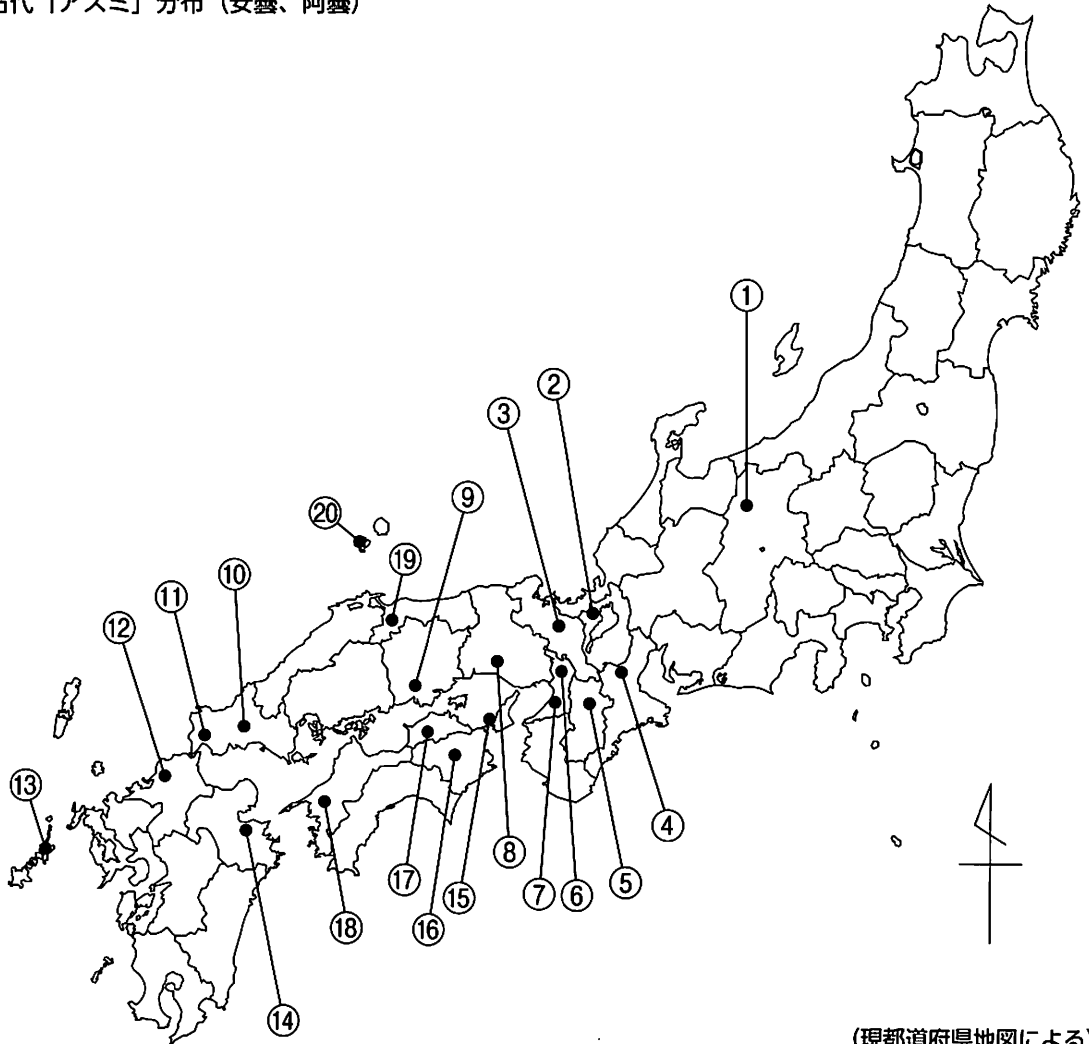
図表1 古代「ムナカタ」分布 (宗像・宗形・胸形・胸肩など)



(現都道府県地図による)

①	下野国	寒川郡	胸形神社	延喜式神名帳
②	尾張国	中島郡	宗形神社	同
③	山城国	愛宕郡	宗方君族	天平4年(732)計帳断簡
		葛野郡	宗像神(松尾社)	秦氏本系帳など(勸請)
		右京	宗形横根	続日本後紀承和6年9月辛丑条 (紀伊国名草直弟日の女と結婚)
			宗形朝臣	新撰姓氏録
		左京	宗像神	三代実録元慶4年(880)3月27日条(故太政大臣藤原良房:東一条弟)
		久世郡	宗形阿良足神	風土記逸文南郡並栗社
④	大和国	城上郡	宗像神社	延喜式神名帳など
⑤	河内国		宗形君	新撰姓氏録
⑥	播磨国	託賀郡黒田里	宗形大神	風土記
⑦	備前国	赤坂郡	宗形神社	延喜式神名帳
		津高郡	宗形神社	同
⑧	長門国	(厚狹郡?)	宗形神	日本紀略寛平3年(891)8月28日条
⑨	筑前国	宗像郡	宗像神社	延喜式神名帳など
			大領宗像朝臣	長屋王木簡、続日本紀など
			宗形部	万葉集16など
		宗像郡荒城郷	宗形朝臣・宗形部	天平勝宝4年(752)11月17日優婆塞貢進解
		遠賀郡宗像郷		和名抄
		御笠郡	大領宗形部	統紀和銅2年(709)6月乙巳条
		島郡川辺里	宗形部	戸籍
	(筑前国)	三团	兵士宗形部	大宰府木簡(御笠・遠賀、?)
⑩	肥前国	(松浦・高来郡?)	宗形(天)神	三代実録貞観13年(871)4月3日条など
⑪	豊前国	仲津郡丁里	宗形部	戸籍
⑫	伯耆国	会見郡	胸形神社	延喜式神名帳、文徳実録斉衡3年(856)8月乙亥条

図表2 古代「アズミ」分布（安曇、阿曇）



(現都道府県地図による)

①	信濃国	安曇郡	主領安曇部百島	天平宝字8年(764)10月正倉院調布銘
		安曇郡前科郷	安曇部真羊	同
②-a	近江国	伊香郡安曇郷		和名抄、平城宮木簡
②-b		高島郡安曇河御厨		万葉集7の1238,9の1690(阿渡川・阿戸)、寛治4年(1090)3月24日鴨御祖大神宮申状案など(堅田御厨網人)
③-a	山城国	石京	安曇宿禰 阿曇維成	新撰姓氏録 日本後紀延暦21年(802)9月丙辰条(隠岐国へ流罪)
③-b	山城国	玉井庄(綴喜郡)	庄司ほか安曇	永久5年(1117)6月12日山城国玉井庄住人等解など(木津川流域)
③-c	(山城国カ河内国)		阿曇山背連比羅夫	日本書紀皇極元年(642)2月戊子条
④	伊賀国	玉瀧袖(阿閉郡)	工安曇	天喜3年(1055)10月28日伊賀国玉瀧袖惣檢校等解
⑤	大和国	添上郡左京六条二坊八坪隅	安曇仲子相伝領	寿永3年(1184)4月24日安曇仲子畠地光券
		添上郡六条・七条各一里内	安曇田庄	延久2年(1070)9月20日興福寺大和国雑役免坪付帳
⑥	摂津国	(西成郡など)	安曇江 阿曇寺	続日本紀天平16年(744)2月丙辰条、天平勝宝2年(750)4月12日民部省符など 日本書紀白雉4年(653)5月是月条注(5年7月とする)(僧旻死去)
		住吉郡	安曇連(等) 安曇連	住吉大社神代記(住吉三神を祭祀) 新撰姓氏録
⑦	河内国			
⑧-a	播磨国	掛保郡石海里 掛保郡浦上里 掛保郡占上郷口家里	安曇連百足・太牟 安曇連百足等 阿曇	風土記(開発・稲)(孝徳朝) 同(難波浦上から移住) 平城宮木簡
⑧-b	播磨国	赤穂郡有年庄	専当・寄人安曇ら	長和4年(1015)11月16日国符
⑨	備中国	浅口郡船穂郷	阿曇部押男	平城京木簡(調塩)

⑩	周防国	吉敷郡神埼郷	阿曇五百万呂・阿曇部□麻呂	平城宮木簡(調塩)
⑪	長門国	美祿郡	安曇・安曇部	長登銅山木簡
⑫-a	筑前国	糟屋郡安曇郷		和名抄
		糟屋郡	阿曇社	住吉大社神代記
⑫-b	筑前国		阿曇神 8 戸	新抄格勅符抄(宗像神 74 戸、大神神 62 戸、住吉神 36 戸)
⑬	肥前国	松浦郡値嘉郷	阿曇連百足	風土記
⑭	豊後国	海部郡	阿曇部	戸籍(山部も多い)
⑮-a	淡路国	野島(津名郡)	阿曇連浜子(黒友とも)	日本書紀履中即位前紀(野島の海人を率いて住吉仲皇子につく)(阿曇目)
⑮-b	淡路国		国司安曇宿祢虫麻呂・広道の交替	正税帳
⑯-a	阿波国		阿曇部	天平 3 年(731)6 月 24 日勅(男帝の時、供奉する戸座)
			伴生安曇豊主	観音寺木簡
⑯-b	阿波国	名方郡	安曇部粟麻呂	三代実録貞観 6 年(864)8 月 8 日条(安曇宿祢百足の苗裔)
		名方郡佐渡郷	阿曇部佐婆ら	平城京木簡
		名東郡	安曇経見	観音寺木簡
		那賀郡幡羅郷海部里	阿曇部ら	平城京木簡(調御取録)
		板野郡カ勝浦郡余戸郷	安曇部太剛	観音寺木簡
⑰	讃岐国	大内郡入野郷	多数の安曇	寛弘元年(1004)戸籍(偽籍)
⑱	伊予国	伊与郡石井郷海部里	阿曇部太剛	平城京木簡(銅楚割)
⑲	伯耆国	会見郡安曇郷	間人安曇□	和名抄、正倉院調布録
⑳-a	隠岐国	海部郡	少領阿曇三雄	正税帳
		海部郡前里	阿曇部都祢	平城宮木簡(軍布 20 斤)(軍布はメ)
		海部郡佐吉郷	阿曇部□□多	同(軍布 6 斤)
		海部郡作佐郷治田里	阿曇部止巳	平城京木簡(腊贄 1 斗)天平 10 年(738)(腊はキタヒ)
		海部郡作佐郷大井里	阿曇部意比	同(調三取鮓 4 斤)天平 7 年(735)
		海部郡佐々郷大井里	阿曇部	平城宮木簡(御調海藻 6 斤)養老 7 年(723)(海藻はメ)
		海部郡作佐郷大井里	阿曇部真佐	平城京木簡(調短鮓 6 斤)天平 7 年
		海部郡海部郷志吉里	阿曇部与呂比	同(調海藻 6 斤)天平 7 年
		海部郡□□□□□□	阿曇部与里比	同(調海藻 6 斤)天平 6 年(734)
		海部郡布勢郷大浦里	阿曇部知麻呂	同(烏賊 6 斤)天平 7 年
		海部郡布勢郷大浦里	阿曇部奈々都	同(調短鮓 6 斤)天平 7 年
		海部郡布勢郷敷多里	阿曇部広田	同(調海藻 6 斤)天平 6 年
		知夫郡由良郷	阿曇部赤人	同(調海藻 6 斤)天平 6 年
⑳-b	隠岐国		阿曇部麻支	平城宮木簡(烏賊 6 斤)
⑳-c	隠岐国		浪人安曇福雄	三代実録貞観 11 年(869)10 月 26 日条

表 3 和名抄「ムナカタ」「アズミ」「アマ」郡・郷・里

ムナカタ	アズミ	アマ
筑前国宗像郡	信濃国安曇郡	上総国海上郡 下総国海上郡 尾張国海部郡海部郷 隠岐国海部郡海部郷 紀伊国海部郡 豊後国海部郡
筑前国遠賀郡宗像郷	近江国伊香郡安曇郷 伯耆国会見郡安曇郷 筑前国糟屋郡安曇郷	上総国市原郡海部郷 武蔵国多摩郡海田郷 遠江国敷智郡海間郷 伊勢国河曲郡海部郷 信濃国小県郡海部郷 越前国坂井郡海部郷 丹後国熊野郡海部郷 出雲国大原郡海潮郷 安芸国佐伯郡海部郷 阿波国那賀郡海部郷 土佐国高岡郡海部郷 筑前国怡土郡海部郷 筑前国那珂郡海部郷 筑前国宗像郡海部郷

古代における日野川流域の“海の民”

1. 長者原と海部氏

承安2年(1172) 大山寺鉄製厨子

本朝伯州会東郡地主紀成盛記文。本系紀納言。于時承安二年〈壬辰〉十一月廿日〈乙酉〉奉鑄大山権現御鉢三尺金銅地藏尊容一軀、即鑄鉄厨子奉安置之。

★紀成盛とは何者か？

* 『吉記』 寿永元年(1182) 8月20日条

「伯耆国の合戦の事。風聞に云わく、伯耆国の住人成盛〈海六と称し、先年(小鴨)基保が為に滅亡せらるものなり。〉と基保、合戦す。」

* 『伯耆大山寺縁起』 七十段一養和元年?(1181?) -

「当国に村尾・小鴨とて二人の大將東西に権をあらそひける(以下略)」

* 『玉葉』 寿永3年(1184) 2月2日条

「(上略) 伝え聞くなり、伯耆国美徳山に院の御子と称せるの人あり。(中略) 平氏追い落とさるの後、その実を顕し院の御子と称す。已に伯耆半国を伐り取りて、海陸業成〈かの国有勢武勇の者なり〉に之を付し奉る。但し、小鴨基康は従わずと云々。」

* 『平家物語』 長門本(国書刊行会蔵本) 卷第十六

「山陽山陰四国九国より宗と聞えて参りけるは、(中略) 伯耆国には小鴨介基康、村尾海六成盛、日野郡司義行、出雲国には塩屋大夫、多久七郎、朝山、木次、身白、横田兵衛惟行、富田押領使、(以下略)」

* 『吾妻鏡』 建久元年(1190) 6月27日条

「伯耆国住人海太成国、召し下され、囚人と為して義盛に預けらる。」

紀成任・成平(11世紀半ば) …伯耆国司に随行して下向後、土着か(『尊卑分脈』『紀氏系図』)

⇒ 紀成盛：西伯耆・会東郡(会見郡東部)を拠点に活動

⇔ 東伯耆の小鴨基康(国衙在庁官人系)と対立

* 複数の姓：「村尾」「海」

「村尾」=日野郡村尾(現・日南町三栄)

「海」(海部)=会見郡安曇郷(現・米子市安曇)

⇒土着後、西伯耆を基盤とする氏族との連携を図る

(参考) 『日本書紀』 12 履中天皇元年 4 月丁酉条

阿雲連浜子を召して詔して曰く。汝、仲皇子と共に謀逆し、將に国家を傾けんとす。罪は死に当らん。然して大恩に垂し死を免じ墨を科す。即日之に黥す。此に因りて時の人、阿曇目と曰う。また、浜子に従えり野島海人等の罪を免じ、倭の將代屯倉に置く。」

※ 平安時代末期、西伯耆(日野川下流域)において海部氏が有力な一族

⇨ 奈良時代以来の郡領氏族(郡司を担う氏族)の系譜をひく一族であった可能性

(会見郡家=長者原⇨成盛屋敷伝承)

2. 奈良・平安時代の会見郡（日野川下流域）の様相

* 『和名類聚抄』 源順（延喜 11（911）年～永観元（983）年）編纂

汗入〈安世利〉郡

束積 汗入 奈和 尺度 高住 新井

会見〈安不見〉郡

日下 細見 美濃 / 安曇 巨勢 蚊屋 天万 千太 会見 星川 鴨部 半生

日野〈比乃〉郡

野上 葉侶 神戸* 阿太 武庫 日野 *高山寺本なし

布勢 野坂〈乃佐加〉 刑部 大坂 日置 勝部 日野 *高山寺本

※ 10 世紀（平安時代）の様相 ⇒ 必ずしも 7～8 世紀（奈良時代）と同一ではない

※ 古代の“郷”； 基本的に人間集団としての郷（里・五十戸 = 1000～1500 人程度）

→ 領域の概念はない



（坂長第七遺跡出土土木簡）

星川マ小身

（嶋方）

（平城宮第一次大極殿院西辺出土土木簡）

伯耆国相見郡巨勢郷雜腊一斗五升 養老 年十月

187 × 14 × 3 031

河村郡合定式任漆佰参拾陸束 相見郡合定伍千陸拾式束

久米郡定五千壹佰壹拾陸束 合三郡定税員一万二千九百十束

河村郡合定式任漆佰参拾陸束 相見郡合定伍千陸拾式束 合三郡定税員一万二千九百十束

会見郡と部姓郷

※部姓郷……郷名が「部」に由来する郷＝部民集団中心の編戸

(参考) 部とは、大化の改新以前における支配体制の単位。諸豪族による「カキ」(民・民部・部曲)の領有を前提とするところの王権への従属・奉仕の体制、朝廷の職務分掌の体制。

日下郷 (日下部：雄略皇后〈仁徳皇女〉草香播俊姫の子代)

美濃郷 (三野部：三野臣) *三野部：美濃国本須郡(木簡)

蚊屋郷 (加夜部?：賀陽臣?) *備中国賀陽郡の郡領氏族

安曇郷 (安曇部：阿曇連) *阿曇部：隱岐国海部郡／備中国浅口郡(木簡)／大宝二年豊後国戸籍

星川部 (星川部：星川臣) *星川部：伯耆国会見郡(木簡)

鴨部郷【賀茂郷】(賀茂部)：鴨君 *会見郡賀茂郷戸主賀茂部馬(正倉院)

★非部姓(地名)郷……細見 天万 千太 會見(*會見部〔但馬国分寺木簡〕) 半生

※部姓郷が広く分布する郡は周辺に存在しない

⇒部民制が施行された6世紀段階の、周辺地域とは異なる王権との関係と地域的な繋がりを反映?

3. 日野川流域の横穴式石室にみる地域的特性

横穴式石室：6世紀を中心とする石室の形態

縦穴系横口式石室：5世紀後葉～6世紀前葉にかけ形態的連続性
：北部九州(宗像地域)から受容

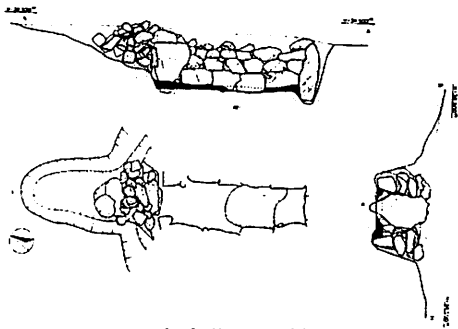
5世紀後葉：宗像勢力、海上交通の掌握・首長権確立
⇒筑紫宗像からの移住・直接交渉を持った集団の存在(角田2009)

羽子板形石室：6世紀後半～=北部九州の動向と異なる
=在地化する傾向(交渉の断絶)

*基本的な石室の特徴：日野川流域を中心に一定のまとまり
淀江平野(汗入郡)・出雲国とは異なる

⇒日野川流域の地域的紐帯の中心に「海の民」が存在か

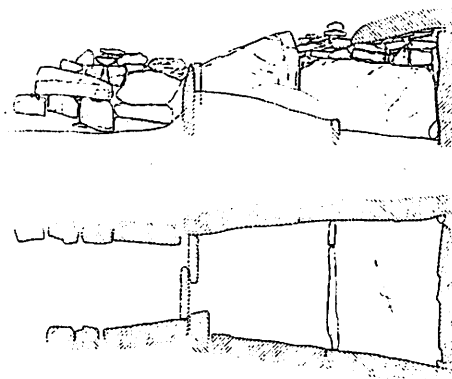
角田徳幸 2009「山陰における九州系横穴式石室の様相」
『九州系横穴式石室の伝播と拡散』北九州中国書店



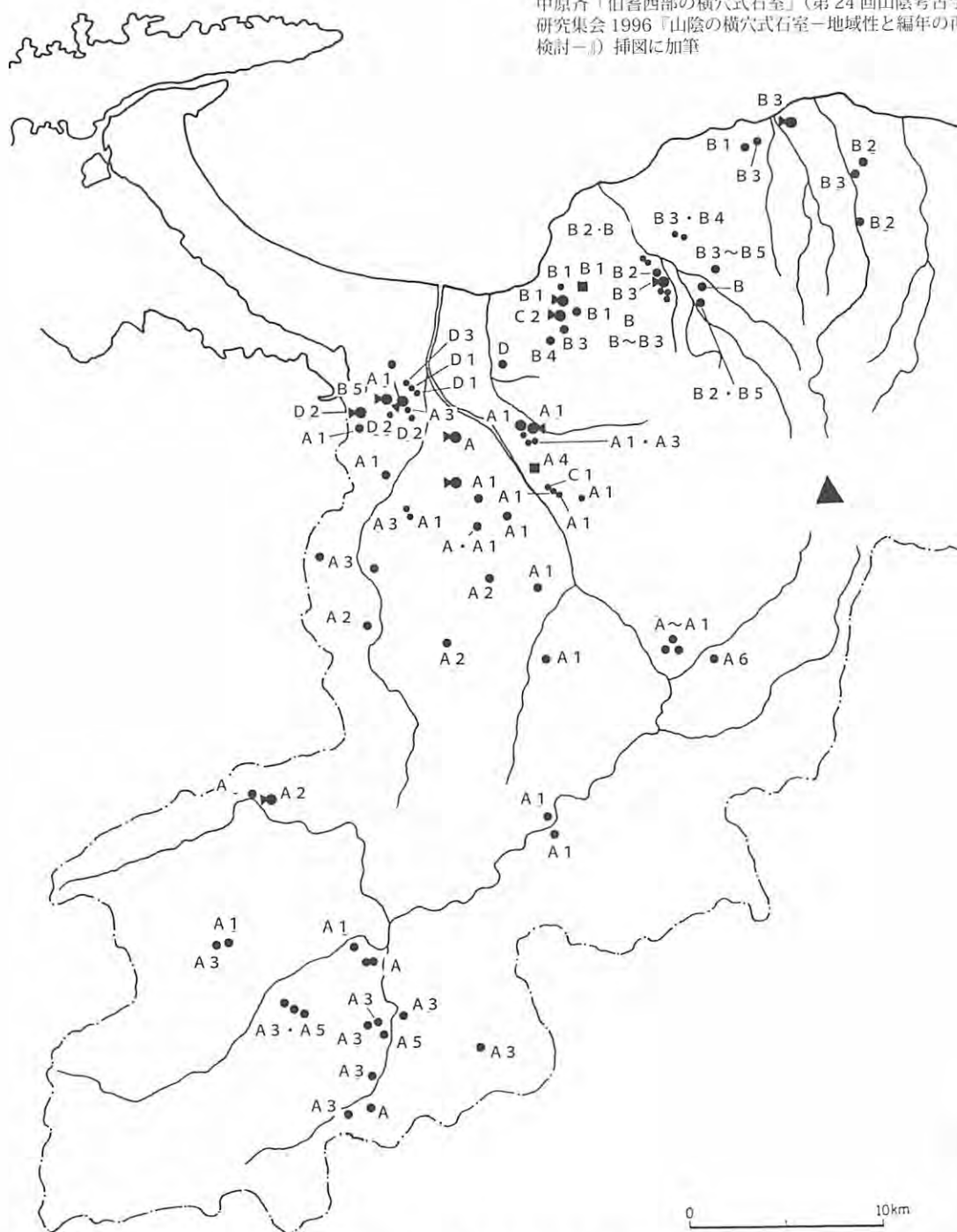
東宗像 6号墳



陰田 37号墳



宗像 1号墳 A石室



伯耆西部の横穴式石室の分布と分類

- | | |
|---------------------|--|
| A類：割石・自然石により構築される石室 | D1類：竪穴系横口式石室：東宗像6・7号墳 |
| A1類：「羽子板形」の平面プラン | D2類：竪穴系横口式石室の系譜を引く石室 |
| A3類：狭長な平面プラン：日野川上流域 | |
| B類：切石造りの石室：岩屋古墳 | C類：長方形の玄室、両袖式に狭長な羨道が取りつく石室：長者ヶ平古墳・細見神社古墳 |



出雲弥生の森博物館専門研究員 高橋 周

1975年東京都生まれ、現在、米子市在住。

2003年学習院大学大学院人文科学研究科史学専攻博士後期課程単位取得退学。2008年より出雲弥生の森博物館専門研究員。専門は日本古代史。著書に『日本古代史年表（下）』（共著・東京堂出版）主要論文に「平安前期の衛府と三寮考人」（『延喜式研究』24号、2008年）他。

阿曇族の「復権」 — 本拠地からの最新報告 —



NPO志賀島歴史研究会 岡本 顕実

1944年東京生まれ。現在、福岡市在住。

早稲田大学第一文学部卒業。毎日新聞入社。

退社後はフリーライターとして雑誌などに投稿。

著書 郷土歴史シリーズ「志賀島の金印」「元寇」「邪馬台国への道」

志賀島から新宮町（粕屋郡）一帯を拠点として阿曇族だが、現代に至っては、正直なところ地元でも甚だカゲが薄い。お隣りの、朋友とでも言うべき宗像族が宗像大社を擁し、最近では沖ノ島を中心とする世界遺産への申請に氣勢をあげているのに比べ、わが阿曇族は「金印」（国宝）の話のついでに少し語られるほどだ。もう一つ、阿曇族と兄弟と言っても良い住吉族（記紀）だが、そのお大尽ぶりは言うに及ぶまい。

明治に入っの神社ランキング——

宗像大社（宗像族） 官幣大社

住吉大社（住吉族） 官幣大社

志賀海神社（阿曇族） 官幣小社

格段の差である。これには古代の政争が係わっている。「応神天皇三年十一月、阿曇連の祖、大浜宿禰を海人の宰にする」（日本書紀）。つまり当初は宗像族、住吉族の上位に阿曇族があり、古代海人族のトップであった。歴史時代、663年の白村江の戦い。将軍・阿曇比羅夫は軍船170、兵5000を率いて唐・新羅と戦ったが、敗死。日本も全面敗北。この史実のあたり、阿曇氏の中央に於ける重要な地位が、よくわかる。後に阿曇稲敷は日本書紀の修史事業にも編集者の一員として携わった。国家の威信をかけた初の大事業である。宗像族、住吉族の関係者の名は無い。

これほど枢要な位にあった阿曇氏が、ある日突然、失脚する。政治的なライバル、高橋氏との確執で、内膳奉膳ないせんのかみの要職にあった阿曇継成つぐなりが延暦11年(792)、桓武天皇の怒りに触れ、絞刑に処せられるところを、死一等を減じられて佐渡に配流される。これにより

阿曇氏は一族全体が中央政界から永久追放され、政治生命にピリオドが打たれたのである。

だが、中央政界から放逐されたとは言え、それがすなわち阿曇氏の“滅亡”を意味したものではない。官を追われた阿曇族は、民の立場で堂々と命脈を保つ。

亀山勝氏（長野・安曇族研究会）の調査では全国に「あづみ」「しか」の由来と伝承を語る地区は（市町村単位で）優に30個所を超える。それは北は青森から南は大分まで広範囲に及ぶ。

全国二位、西日本最大の相島の積石塚群は阿曇族の墳墓

阿曇氏の本拠地は和名抄（10世紀）によれば筑前国粕屋郡阿曇郷と言われる。現在の行政区で言えば福岡市東区和白から粕屋郡新宮町しんぐうまちにかけての海岸地帯に比定されるが、具体的には未詳である。この阿曇郷の西隣りに志賀島があり、島の志賀海神社は阿曇氏が奉斎する神として知られる。和名抄では志賀島は志珂郷に比定されるが、これは（律）令制度の施行によって50戸1郷の原則が立てられ、これによって阿曇郷、志珂郷と別の郷に編成されたものと思われる。従って令制施行以前の阿曇族は本来、一体的な関係を有していたようだ。

この阿曇族の本拠地に於いて最近、きわめて興味深い知見が得られたので、それをここに報告しようと思う。以下、地図を参照しながら読み進んで下さい。

今年7月27日、新宮町（前出）の沖合に浮ぶ相島あいのしまで講演会が開かれた。相島は町営渡船で17分

ほど。周囲6km、面積1.3km²の小さな島で、一般的には江戸時代の朝鮮通信使を迎えた客館があった所として知られるが、もうひとつ、歴史の意外な表情がある。それは大規模な積石塚群があることで、別表1を見て頂きたい。全国の積石塚群の一覧だが、相島のそれは全国二位のスケールだ（もちろん西日本で最大）。平成18年、国史跡指定。

積石塚は石だけで造った古墳で、長野の大室古墳群が著名だが、相島のような小さな島にこれだけ多数の積石塚があったことに古墳の専門家も驚いた。古墳内部からは鉄製品や韓国系の初期須恵器など貴重な遺物も見つかった（図1）。

講演会は、相島の積石塚群を考える催しで講師は「海の道むなかつた」館長、西谷正氏（九大名誉教授、日本考古学協会・元会長）。この著名な学者が講演の最後に発言した内容が会場をおどろかせた。「私は最近、相島の積石塚は阿曇族のものと思うようになった」。会場がおどろいたのにはわけがある。従来、相島の積石塚は宗像族の栄光を体したのと言われ、その理論的支柱者が西谷氏であったからだ。西谷氏は意見変更の理由として新宮町が古代の阿曇郷だったこと等を挙げた。

陸の正倉院、宮地嶽古墳は阿曇族の首長の墳墓

話が違って10月18日、福岡市で第8回金印シンポジウムが開催された。主催は私の所属するNPO法人・志賀島歴史研究会、共催・福岡市。ここでも刮目すべき意見が相次いだ。今回の金印シンポの主要テーマは①国宝「金印」の謎に迫る②阿曇族の足跡の検証――。

この中で、「宮地嶽の神様と阿曇族」と題して講演した宮地嶽神社（写真1）の浄見讓宮司は大胆な発言で注目された。

同神社（福岡県福津市）の境内で見つかった宮地嶽古墳（国史跡）は横穴式石室を持つ円墳で、幅4mを超える巨大な石材を使い、長さは23m。奈良県明日香村の石舞台古墳を超え、明日香村の見瀬丸山古墳に次いで日本で2番目の規模を誇る（図2）。6世紀末から7世紀初めのもの。江戸中期、大雨の山崩れによって開口し、大正時代、石室前から馬具、刀装具、ガラス製の板や玉が見つかった。昭和26年

には石室入り口から20mの地点で金銅製の冠（写真2）が見つかり、以後、続々と優品が出土（写真3、4）。その数300余点を数えた。品目は金銅製の①鏡②轡③杏葉④大刀の他、銅椀や銅盤などで、20点が国宝指定。7世紀以降のわが国の第一級品である。陸の正倉院といわれる所以だ。

この宮地嶽古墳について、浄見宮司はシンポジウムでも「阿曇族の首長の墳墓である」と言っただけでなかった。それには深いわけがある。古代、筑紫地方にあった、とされる「筑紫舞」。かつての“九州王朝”の宮廷舞ともいわれ、續日本紀（卷十一）、天平3年（731）に記されているが、ほぼ途絶えかけていたその舞いを同神社が苦勞して復興に取り組み、成功して今年で30年。同宮司は自ら舞う（写真5）。そして言う。「わが国の芸能の祖といわれる阿曇磯良翁。志賀海神社の御祭神を祖にされた方です。阿曇族は海人族として全国に進出し、芸能はもちろん、いろいろな文化を広めた。筑紫舞が舞われた洞窟は、まさに宮地嶽古墳の場所でした」

従来、宮地嶽古墳も古代宗像族の繁栄を示すものと言われて来た。それは宮地嶽神社が古来、宗像75社の1つとして著名だったからだ。それが覆ったようだ。

宮地嶽古墳から出土した日本一大きな黄金の大刀

金印シンポでは次に福岡県教育庁文化財保護課の赤司善彦課長が宮地嶽古墳から出土した黄金の大刀を復元した苦心談を披露。赤司氏は今年3月まで九州国立博物館に勤務していたが、2年の歳月をかけて大刀の復元に取り組み、今年1月に一般公開にこぎつけた。残片がわずかに残っていた金銅装（銅に金メッキ）の頭椎大刀（大形）は柄頭と鐔の一部、それに鞘金具と貴金具、そして鉄刀刀身の一部だけだったが、比類ない大型の柄頭や鐔から、大刀がいかに長大であったか、を窺わせた。

復元の結果、大刀は全長、実に307cm、玉銅30kgを要した正に日本一の巨大大刀であった（写真6）。このような巨大な大刀がなぜ必要だったのか。赤司氏は権力のシンボルと見る。そして次のように解説する。

海の民の本拠地である宗像地域に形成された前方

後円墳は、大きく東の釣川流域と、宮地嶽古墳のある海岸部の津屋崎地域に分かれて立地している。津屋崎古墳群は、九州最大の勢力を誇った筑紫君磐井の古墳がある八女古墳群を凌駕しており、西日本で大規模な古墳群を造営していた一大勢力が形成されていたことを物語っている。津屋崎地域には現在の韓国全羅南道の渡来人か定住していたことが明らかにされている。彼らは当該地域の大豪族と深く関わりながら、朝鮮半島との対外交易で大きな役割を果たした。これによって得られた経済的基盤を背景に、ヤマト王権との結び付きが強化され、宮地嶽古墳の造営と黄金の巨大大刀がもたらされたといえるのではないだろうか。

以上、^る縷見てきたが、相島の積石塚群、宮地嶽古墳（神社）、復元なった日本一大きな黄金の大刀——いずれも極く最近になって阿曇族との関連を指摘する声^ろが急に高まって来たものだ。断定するには慎重であらねばならないが、筆者にはどうも阿曇族の「復権元年」であるかのような印象がしてならない。今後の大きな検討課題が出来た。



図1 相島積石塚群120号墳築造風景及び周辺のイメージ図（新宮町教育委員会）

表1 積石塚群一覧

長野県大室古墳群	324基
相島積石塚群	254基
山口県ジューコンボ古墳群	160基
鹿児島県指江古墳群	140基
長崎県曲崎古墳群	101基
愛知県旗頭山古墳群	38基

注) 大室古墳群は土墳を含め総数500基

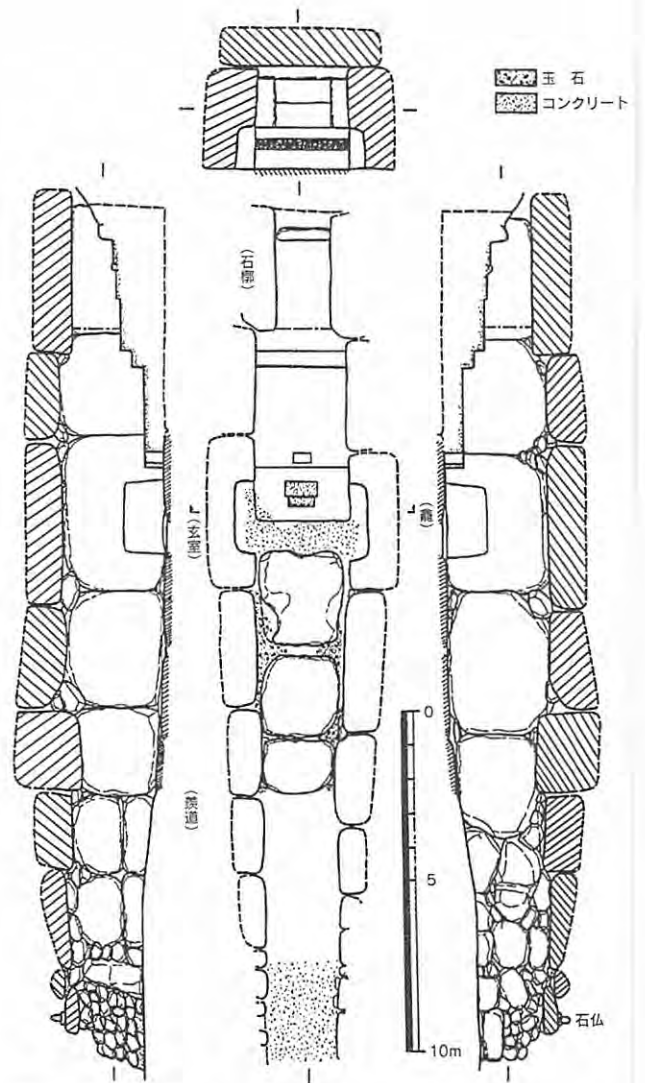


図2 宮地嶽古墳（宮地嶽古墳石室実測図）



図3 志賀島周辺の地図



写真1 開運の神様として知られる宮地嶽神社。日本一の大注連が目を引く。阿曇族との関係は…。



写真3 緑色ガラス素材板



写真2 宮地嶽神社から出土した金銅製の冠



写真4 金銅製の馬具

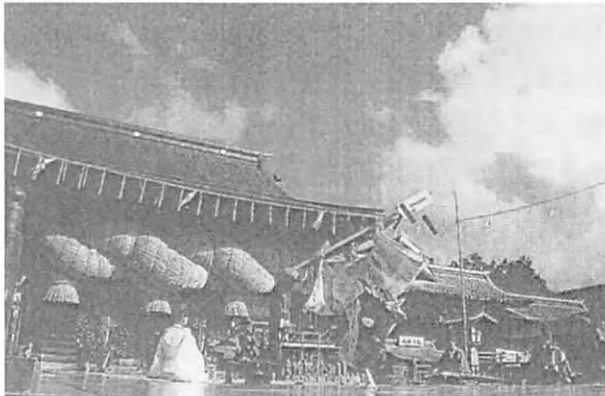


写真5 筑紫舞には跳躍や回転など独自の振りがあり、まさに幻の秘舞といわれる珍しい舞いだ。

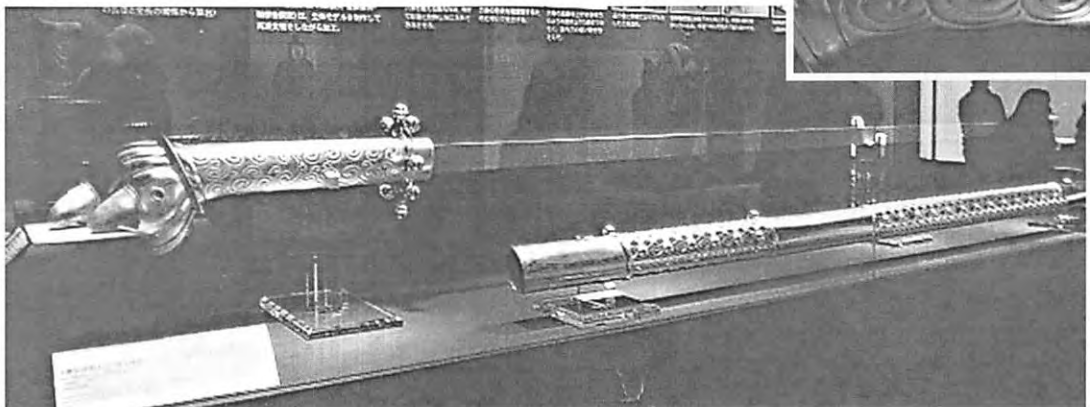


写真6 日本一大きな黄金の大刀（全長3m。宮地嶽古墳出土）

長野県松川村観松院の弥勒菩薩と安曇族



安曇族研究会会員 松本 猛

1951年東京生まれ。美術・絵本評論家、作家、絵本学会会長、ちひろ美術館（東京・安曇野）常任顧問、信州自遊塾塾長、美術評論家連盟会員、日本文藝家協会会員、日本ペンクラブ会員。1977年にちひろ美術館・東京、97年に安曇野ちひろ美術館を設立。同館館長、長野県信濃美術館・東山魁夷館館長を歴任。

長野県北安曇郡松川村（安曇野の北端）にある観松院には、半跏思惟像の弥勒菩薩像がある。この仏像は国の重要文化財で、「7世紀に新羅で造られた」といわれ、その仏像を探っていくと、玄界灘に浮かぶ対馬の浄林寺の仏像、さらに百済滅亡の地である韓国扶余市にある国立扶余博物館の仏像が浮かび上がってくる。

日本彫刻史の権威、久野健はその著『古代小金銅仏』のなかで、「この像は台座の下から宝冠の上まで約30cmの小像であるが面相は長く、胴が強くくびれ、裳の衣文線もリズムを持っている。山形宝冠の文様や、眼、鼻、唇の彫りもシャープで、いかにも真摯な古代彫刻のよさをいかんなく発揮している。（中略）宝冠には、三日月と太陽を組合わせた文様があり、これは、法隆寺夢殿観音の宝冠やソウル中央博物館の有名な弥勒像にも見られ、また遠く古代ペルシャの武人像の宝冠にもしばしば出てくるもので、周辺の唐草文様とともに古代中央アジアの美術ともつながりをもっている」と述べている。

観松院の半跏像に似た小金銅仏は、和歌山の極楽寺・奈良の神野寺などいくつかあるが、その造形力や文様などから、明らかに観松院の仏像のほうが、質が高く、古いものと考えられる。法隆寺の仏像群よりも古い。ともに調査をした阪大の藤岡教授と韓国中央博物館のミン学芸員の意見によれば、この観松院の半跏像は現在日本と韓国で確認できる最も古い6世紀の百済の仏像の可能性が高い。あるいは中国南朝の仏像が百済経由で入った可能性もある。

一方、長野県との境に位置する新潟県妙高市関山にある関山神社にも観松院の仏像と同時期の菩薩立像がある。また長野市には善光寺に絶対秘仏で見る

ことができない阿弥陀三尊仏があるが、いずれも6世紀ころまで遡れる可能性がある。

それではこれらの仏像は誰の手によって半島から持ち込まれたのであろうか。それを解く鍵は、527年に起きた北九州の豪族磐井の乱であろうと考えられる。

『日本書紀』や『継体記』によると、継体天皇21年（527）、朝鮮半島新羅と結んだ北九州の有力首長つくしのくにのみやつこいわい筑紫国造磐井は、朝鮮出兵を求めたヤマト王権に反旗を翻した。これを倒すためのヤマトの討伐軍との戦いは1年余にわたり、磐井はついに斬られ戦乱は終わった。磐井の子葛子かすののみやけは糟屋屯倉をヤマト王権に献上して罪を免れたという。

糟屋屯倉は博多湾を望む安曇族の本拠地である。安曇族は磐井そのものではなかったとしても、半島、大陸と最も近い位置にある九州の豪族としての磐井と深い結びつきがあったはずである。したがって、「磐井の乱」による磐井の没落ととも、安曇族もまた、拠点とする北九州から移動、または脱出せざるをえなかったのではないだろうか？

糟屋屯倉をヤマトに奪われ、九州の本拠地を失った安曇族はその大半の勢力を対馬や伽耶諸国に動かしたことが考えられる。一方、宗像一族は北九州を勢力下に置いたヤマトのバックアップの中で百済との交易を一手に引き受け強大になっていった。さらに朝鮮半島の伽耶諸国と関係深かった安曇族は、562年伽耶諸国が新羅に滅ぼされるとついに安住の地を求めて大移動を行う。そして百済の仏像を携えた安曇族が信濃へと逃れてきたと考えられる。

それでは安曇族はどこから安曇野へ入ったかが関心を呼ぶ。大きく三説が考えられる。

①距離的に一番近い糸魚川から姫川をさかのぼり、安曇野に入ったという考え方。糸魚川はヒスイの産地であり、古代から安曇族は重要な交易の品として、ヒスイをあつかっていたはずだから、糸魚川に基地があったとしても不思議ではない。

②直江津から関川沿いに入り、善光寺平を経て犀川沿いに明科から安曇野に入ったという考え方。これは関川の起点近くの関山神社に観松院の仏像と同時期と考えられる仏像が存在し、安曇族がこのルートを使った可能性は高い。しかし、これが安曇野に定住した安曇族であるという確証はない。さらに大胆な発想をすれば、善光寺の絶対秘仏はその模刻像の特徴から百済仏ではないかと言われている。関山神社から長野までは比較的平坦であるから、安曇族が善光寺平を本拠地にし、善光寺の元を開いたという推理も成り立つ。これを裏付ける傍証として善光寺平から見える山に安曇野の有明山とは別の有明山(千曲市)が存在していることがあげられる。(有明山という名の山は日本に4つしかないようである。安曇族の拠点の一つと考えられる対馬と、残りの一つは北海道である)

③海人族は船を操れるので、信濃川を延々とさかのぼり千曲川を経て犀川をさかのぼり明科から安曇野へ入ったという考え方。穂高神社はこの考え方をとっている。この場合も善光寺平にも本拠地を作ったという考え方が成り立つ。善光寺平には海神宇都志日金拆命(穂高見命と同一神か)を祀る水鉋斗売神社と玉依比売命神社の二つが鎮座する。また、福岡県の相島同様、この善光寺平には日本最大の積石塚古墳群が存在するなど、海人あるいは渡来系の古墳が色濃く残されている地である。

以上、長野県安曇野に第二の本拠地を構えた安曇族、その痕跡を長野県内にもっと広げて探索すれば新たな古代が見えて来ると考えている。



写真1 安曇野観松院弥勒菩薩



写真1 大室古墳の積石塚古墳



写真2 大室古墳の積石塚古墳

旅するオオナムチ — 日本海を結ぶ神話の回廊 —



伯耆の古代を考える会会員 黒田 一正

1948年米子市生まれ。早稲田大学大学院修士課程修了。

大和書房で10年間「東アジアの古代文化」の編集に携わる。

退職後、米子に帰り、今井書店出版室勤務を経て、現在「編集工房遊」を設立し郷土の出版に関わる。共著『山陰の神々』（今井出版）。

序論 九州・山陰・諏訪をむすぶオオナムチの神話

山陰に住まいする者にとって、もっとも馴染み深い神さまといえば、出雲大社にまつられるオオクニヌシ命だと思います。この神は、またの名をオオナムチ命といいます。

この神は全国各地に足跡をのこしています。九州の宗像の女神と結婚し、アジスキタカヒコネ、シタテルヒメという神を生んでいます。また国譲り神話においては、御子神とされるタケミナカタが諏訪に逃げたという伝承が記録されています。山陰と九州・信濃を結ぶ神話は、いかなる経路をへて成立したのか、その背後にどのような歴史が秘められているのか、私案を述べてみたいと思います。

1 王になるための試練の旅

『古事記』によれば、オオナムチは旅を宿命づけられた神さまでした。最初の旅は、八十神たちとヤガミヒメを得るための因幡国訪問です。しかし因幡～伯耆～出雲をめぐる旅は平穏なものではありませんでした。まずは白兔海岸で傷ついた兔に出会います。これを治療して再生させますが、伯耆の手間では、八十神の罠にかかってオオナムチ自身が死んでしまいます。母の愛と女神たちの治療によって再生しますが、八十神の攻撃はなおもつづきます。

ついにオオナムチは、根の国に逃げ込みます。しかしここも安住の場所ではありません。根の国の王・スサノオが繰り返すさまざまな試練が待ち受けていました。しかしここでもスサノオの娘・スセリヒメの助けをかりて試練を乗り切ります。そしてついにスサノオはオオナムチに「お前は地上に帰り、

葦原中国の王になれ」と言葉を投げかけます。このスサノオの予言どおりオオナムチは葦原中国の王になります。

つまり、因幡・伯耆・出雲をめぐるオオナムチの旅は、かれが葦原中国の王になるための試練の旅として、『古事記』の伝承作成者によって位置づけられたものだと思われる。

2 新たな系譜をつくるための旅

では王になったオオナムチはもう旅をしないのかというと、また別の旅が待ちうけていました。コシの国のヌナカワヒメへの求婚の旅です。葦原中国の真の王者になるためには、各地を変遷し、その国ごとのヒメと婚姻を結び、王の系譜を広げることが必要です。その象徴として、コシの国訪問の歌物語が配置されたと思われます。宗像の女神との婚姻も、その一つかもしれません。

3 コシと山陰をつなぐ伝承① 国引き神話

しかしなぜオオナムチのプロポーズの旅に、コシの国が選ばれたのでしょうか。

その謎をとく鍵が『出雲国風土記』の冒頭をかざる「国引き神話」のなかに残されています。狭い国であった出雲は、各地から国を引っ張って国を広げていきます。最後には、大山を^根にして、夜見島（弓浜）を網にして、「高志の都都の三埼」から「三穂の埼」を引いてきました。『出雲国風土記』の島根郡美保郷には「オオナムチとヌナカワヒメが結婚してミホススミという御子が生まれた」と書かれています。「ミホススミ」という神名は、おそらく「美保」

と「都都」の合体した名です。「高志の都都の三埼」は、能登半島の東端「珠洲」に比定されますが、ここには式内社の須須神社が祀られ、その奥宮の祭神はミホスミです。また『出雲国風土記』神門郡には古志郷の名がみえ、「古志の国人」が来て堤をつくったという記事が記録されています。

4 コシと山陰をつなぐ伝承② ケタ政治圏の構想

このように出雲とコシは、神話だけではなく、何らかの歴史的な結びつきがあったと思われます。その歴史的背景について、いくつかの仮説がありますが、なかでも浅香年木氏の「ケタ政治圏」論は、スケールの面、論理的な精度からいっても注目すべき仮説です。

浅香氏は、日本海沿岸に広く分布する「気多」と称する郡名・郷名・神社名・地名に着目します(図参照)。西からたどると、出雲国出雲郡気多嶋、因幡国気多郡、但馬国気多郡、同郡気多神社、加賀国江沼郡気多御子神社、能登国羽咋郡気多神社、越中国射水郡気多神社、越後国頸城郡気多神社、飛騨国気多若宮神社と分布しています。この濃密な分布の背後に山陰とコシを結ぶ地域連携があったと、浅香氏は推定しています。

この「ケタ」分布の中核をなすのが能登半島のつけ根に位置する気多大社(石川県羽咋市寺家町)です。その社伝には、「孝元天皇のとき、コシには鳥と化した魔王や大蛇が出て、人々を苦しめていた。そのときオオナムチ命が三百余社の眷属を率いて、出雲から因幡の気多を経て、コシに來臨し、退治した」という伝承が記録されています。

無論、これらの伝承が歴史的事実だとは思えません。また気多大社の祭神はオオナムチ命とされますが、天活玉命を祭神とする別伝もあります。しかし『出雲国風土記』のコシへの並々ならぬ関心と伝承の成立は、気多大社のオオナムチを主人公とする伝承の成立と一脈通じるものがあります。『出雲国風土記』意宇郡拜志郷の条には「オオナムチ神が、越の八口を征伐した」という記述があり、気多大社の社伝と重なります。また「因幡の気多」を登場させているのも、白兔神話の舞台でもあり、気になるところです。

こうした伝承の回廊とでも呼ぶべき関係については、浅香氏は、「気多」の分布と関連して、日本海沿いに濃密に分布する部民として、海部・日置部・若倭部・船木部・荒木部らに注目し、なかでも日置部について「[ケタ][キヅキ]の政治勢力の拠点に明らかに重なり合う形で濃密に分布を示し、日本海沿岸域一帯に共通する最も代表的な「部民」の一つをなしている」と述べておられます。

5 日置部

浅香氏が、海部に注目するのは、日本海沿いの交流には当然海に関わる人々の介在が不可欠だからです。船木部や荒木部も造船の技術者集団としての性格を持ち、やはり海と関わる人々です。

では日置部とはいかなる人々でしょうか。「日」を「置く」という氏族名から、日神祭祀に関わる集団と考えられています。6世紀に祭祀体制の整備の際に、新しく祭官制の下に設置されました。5世紀後半から6世紀という時代は、ヤマト王権としてはきわめて危機的な時代でした。一つは武烈天皇以後の皇統の断絶の危機です。これをコシ出身の継体天皇の擁立で克服していきます。もう一つが、ヤマト王権の弱体化を見透かしたように、磐井の乱や武蔵国造の乱など、各地で相次いだ地方の反乱をいかに制御するかという難題です。この難題の克服のために、屯倉や部民の設置による直接的な地方支配の強化がおこなわれました。なかでも日置部の全国各地への設置については、日神祭祀による地方統治の新たなイデオロギーを浸透させる役割が期待されました。つまり日置部設置には、王統断絶の危機を、日の御子としての皇統を徹底化し、地方に対しては、地方神を国つ神化=オオナムチ化して、日の御子に奉仕する構造を作り上げることによって克服しようという意図があったと思われるのです。

6 日本海沿いの日置部の分布

あらためて日本海沿いの日置部の分布をみると、一つの特徴がみえてきます。東から能登半島、丹後半島、因幡の長尾鼻、島根半島にはりつくように分布しています。折口信夫は「ケタは海に突き出た棚」つまり半島のことだと述べていますが、まさに日置部は半島=ケタの端に分布しています。

能登半島の東端に日置郷があります。この地は、国引き神話に登場する「高志の都都の三埼」です。門脇禎二氏は、この地で祀られる須須神社を日置氏の祭祀としますが、むしろ土着の珠洲の海人の信仰に、日神祭祀を重ねていったというのが真相に近いと思います。

丹後半島の丹後国与謝郡日置郷も同様です。この地には、有名な浦島太郎伝説のある宇良神社が鎮座し、丹後の海人の根拠地です。その真東の沖合には、若狭湾の海人たちの太陽信仰の聖地である冠島・^{かんじり}くつ 杓島を遠望できます。つまり海から昇る太陽をみることのできる場所です。ここでも日置部は、丹後の海人たちの太陽信仰を取り込みながら、日の御子による統治思想を広げていったと思われます。

7 島根半島の東西の聖地

島根半島はどうでしょうか、この半島の西端には日御碕神社が鎮座しています。ここは海に夕日が沈む聖地です。この神社の宮司は小野氏ですが、古代の一時期、日置を名乗っていました。日沈宮が鎮座する経島を、一名「日置島」といいます。

また東端には、度々ふれる美保の地です。ここに直接的な日置部の存在を示す史料はありませんが、コシの国からの国引き神話に登場する「高志の都都の三埼」が日置郷であり、その式内社がミホスミの神を祀ることからしても、この神話の成立に日置部が何らかの関係をもっていた可能性があります。

この美保の地で注目すべきは、美保神社はもちろんです。島根半島の先端・地藏ヶ崎の沖合三キロの海上にある「沖ノ御前」という小島です。美保関の灯台の先に鳥居が海に向かって立っていますが、そこから遠望できます。また足下の海には、「地ノ御前」島も見えます。この「沖ノ御前」「地ノ御前」を土地の漁師たちは、「恵比須さんの鯛釣り場」と称して、5月5日にはコトシロヌシと后神の御神霊をこの島から、美保神社に迎える「神迎え神事」がおこなわれています。

この島が聖地とされるのは、夏の一時期、海から昇る朝日を遥拝できる場だからです。

8 美保の重要性

このように美保が日神祭祀の聖地としての性格を

もっていることは重要です。

記紀には、この「ミホの前」＝「沖ノ御前」を舞台とする、オオナムチとスクナヒコナ、あるいはオオナムチとオオモノヌシの国づくりの神話が語られています。

オオナムチ命が「ミホの御前」にいと、海の彼方からスクナヒコナがやってきて、両神は協力して国をつくります。つくり終えると、スクナヒコナは常世の国に帰ってしまいます。すると今度は、海を照らして依り来る神がいました。その神がいうには、「吾を祀れば、協力して国づくりができるが、祀らなければ国はできない」と。オオナムチ命がどのように祀ればいいのかを問うと、「吾を大和の青垣の東の山の上に祀れ」と答えました。この神の正体は、三輪山のオオモノヌシ命でした。

なぜ国づくりは「ミホの御前」を舞台として語られるのでしょうか。実はスクナヒコナとオオモノヌシがともに太陽に関わる神だからです。

オオモノヌシは崇る神として蛇神のイメージが強いのですが、もともとは三輪山の太陽神です。「海を光して依り来る神」というのも、海から昇る朝日を表現しています。また「吾を大和の青垣の東の山の上に祀れ」というのは、三輪山山頂に現在も祀られている高宮神社のことです。この神社は「三輪山絵図」(室町時代)にも描かれており、「神坐日向神社」と注記されるように日神を祀る神社です。

スクナヒコナ命については、「天の羅摩船に乗って、鵝の皮を内剥ぎにした衣服を着て、帰り来る神」と表現されるように、小舟に乗って漂流し、最後には常世の国へいく神です。スクナヒコナは、穀霊神・薬の神・酒の神など多くの性格をもつ神ですが、この場面では「天の羅摩船」に乗り「常世の国」へいく神、つまり太陽の子・ヒルコが「うつほ舟」に乗って漂流するという天童伝承(太陽信仰)としての神性を読み解くべきであろうと思います。

このように、ミホは朝日の昇る聖地としての性格が読み取れるのです。

9 国譲り神話の構造

あらためて島根半島の東西の端の朝日と夕日の聖地を見直すと、国譲り神話の構造がみえてきます。

国譲りの交渉は、夕日が海に沈む稲佐の浜でおこ

なわれました。一方、最終決断は、わざわざ朝日の聖地に赴いておこなわれました。この構造こそが、日置部の日神祭祀による統治のイデオロギーであったと思われます。

『出雲国風土記』神門郡日置郷の条には「欽明天皇の時代に、日置伴部らが派遣されてきて、留まって「マツリゴト」をおこなった」と記録されています。この「マツリゴト」については諸説ありますが、まずは6世紀段階における日神祭祀による統治体制の確立、7世紀段階における出雲大社の創建、あるいは日神祭祀による国譲り神話の形成など、段階をへながら実施された諸施策であったと思われます。

10 タケミナカタをめぐる

国譲り神話でもう一つ注目されるのが、タケミナカタです。コトシロヌシが国譲りを受け入れたのに対し、もう一人の息子・タケミナカタは、高天原からの使者・タケミカツチに戦いを挑み、敗北し、諏訪に逃げたとされます。ところが、この神はオオナムチの神統譜にもみられず、出雲でも祭祀された形跡のない神です。これは『古事記』の独自記事ですが、なぜこのような伝承が挿入されたのでしょうか。

諏訪大社は諏訪湖を挟んで上社と下社が鎮座していますが、元宮とされる上社は、土着のミシヤグチ神が本来の神で、そこに外部からタケミナカタが征服神として重なる構造になっています。この諏訪大社について、延長5年(927)成立の『延喜式』では「南方刀美神社二座」とし、『続日本後紀』承和9年(842)の条に「信濃国諏訪郡無位勲八等南方刀美神みなかた従五位下」とあります。

この「南方刀美神社」については、本居宣長以来、阿波国阿波郡名方郡名方郷に鎮座する「多祁御奈刀弥神社」に比定する説が有力です。この名方郡は安曇族の一大根拠地でもあります。中村明蔵氏は、この地を安曇族の本拠地とし、磐井の乱を契機に九州志賀島に進出したとされます。当否はともかく、安曇族の地に祀られる神社と同名の神社が諏訪に祀られるのは、阿波—紀伊—伊勢—尾張・美濃から信濃へ移動した安曇の人々の足跡を語っていると思われます。

こうした歴史を背景にして、もう一つ重要な伝承が『伊勢国風土記』逸文に記録されています。「神

武東征の折、アメノヒワケが伊勢に入り、伊勢津彦を打ち破った。伊勢津彦は諏訪に逃げた。この伊勢津彦はオオナムチの御子神で、一名、出雲建子、又の名を櫛玉命くしだまという」と記されています。これは伊勢の国譲り伝承ですが、これが、出雲の国譲り神話のタケミナカタ伝承になって挿入されたと思われます。さらに「櫛玉命」とあるのは、なんと日置部の祖神なのです。阿波国の対岸には紀伊国における日置部の根拠地があり、伊勢国や尾張国にも日置郷があります。また信濃には多くの日置神社が鎮座しています。日本海側と同様、太平洋側にも、海の民に重なるように日置部の存在が確認できます。

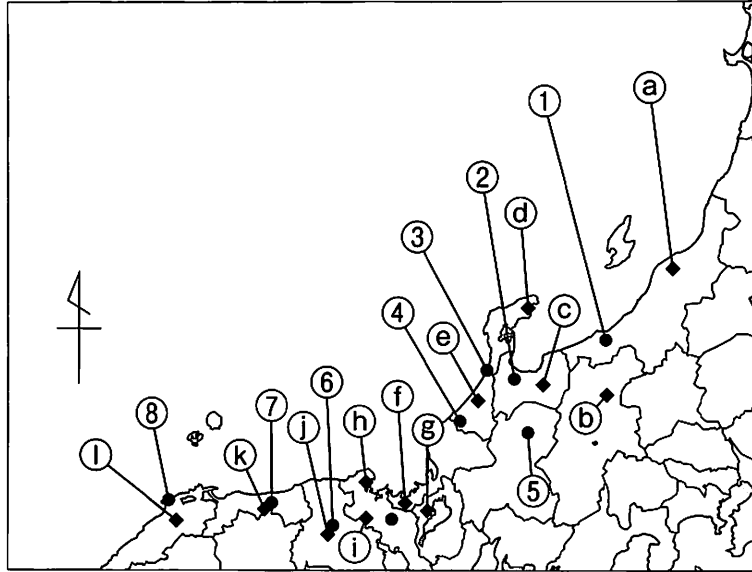
和田萃氏は、「日置部の設置からみて、欽明朝にまとめられた「原」帝紀や「原」旧辭に、そうした物語や伝承、神統譜の素朴な形態はすでに成立していたのだろう」(『古代の出雲・隠岐』(『日本海と出雲世界』海と列島文化2 小学館)と述べておられますが、山陰と九州、山陰と信濃を結ぶ神話の回廊とでも呼ぶべき交流の足跡は、海の民たちのネットワークを基盤に、日置部らによって伝承化され、記録されていったと思われるのです。



写真1 美保神社



写真2 沖ノ御前を望む鳥居



図Ⅰ 日本海沿岸のケタと日置分布図

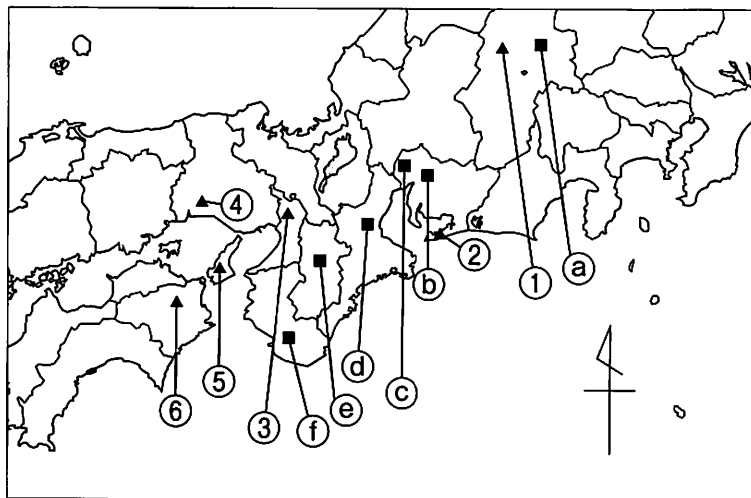
ケタ関係 ●

- ①越後国頸城郡気多神社 ②越中国射水郡気多神社 ③能登国羽咋郡気多神社 ④加賀国江沼郡気多御子神社
 ⑤飛騨国気多若宮神社 ⑥但馬国気多郡、同郡気多神社 ⑦因幡国気多郡 ⑧出雲国出雲郡気多嶋

日置関係 ◆

- Ⓐ越後国蒲原郡日置郷 ⓑ信濃国更級郡日置神社（式内社）ⓒ越中国新川郡日置神社 ⓓ能登国珠洲郡日置郷
 ⓔ加賀国江沼郡日置神社 ⓕ若狭国大飯郡日置神社 ⓖ近江国高島郡日置神社 ⓗ丹後国与謝郡日置郷
 ⓘ丹波国多紀郡日置郷 ⑩但馬国気多郡日置郷 ⑪因幡国気多郡日置郷 ⑫出雲国神門郡日置郷

参考 出雲国出雲郡大領日置臣 出雲国意宇郡舎人郷・日置臣



図Ⅱ タケミナカタ関連分布図

アヅミ関係 ▲

- ①信濃国安曇郡 ②尾張国渥美半島 ③摂津国安曇江 ④播磨国揖保郡安曇連百足
 ⑤淡路国安曇連浜子 ⑥阿波国名方郡アヅミ関連氏族多数

日置関係 ■

- Ⓐ信濃国更級郡日置神社（式内社） ⓑ尾張国愛智郡日置神社（式内社） ⓒ尾張国海部郡日置郷
 ⓓ伊勢国志志郡日置郷 ⓔ大和国葛上郡日置郷 ⓕ紀伊国牟婁郡 日置関連地名多数

「伯耆の古代を考える会」 会員の声

安曇の後裔として

香田 勇

私の住所は米子市下安曇しもあづまです。文献等によりますと奈良時代から平安時代にかけて安曇一族の居住地であったことからついた地名で、九州の福岡県粕屋郡が発祥地のようです。

この安曇一族のことがわかればと思い2013年2月に伯耆の古代を考える会に入会しました。

日頃から南部町、福成の福田正八幡宮の相見宮司さんから南部町鴨部鴨部(奈良時代から平安時代の豪族)と下安曇はとても古い地名であると聞いていました。私達の尚徳地区には12の集落があり江戸時代からセントロ、マントロという行事があります。この行事は愛宕さん、秋葉さん、(秋葉山、秋葉神社、秋葉大権現)の火祭りです。青竹の中に布を入れ灯油をしみこませ何百本も火を灯す行事です。この火祭りの行事が下安曇にはありません。不思議に思って宮司さんに聞いたところ、下安曇の北平神社の御神祭は素戔鳴尊と天照大御神です。

私達は子供の頃から北平神社を荒神さんと呼んでいました。荒神は全国的にはカマドの神、火の神ですが下安曇の荒神さんは農耕、水の神であるとのこと。他地区は火の神を祭り、下安曇は農耕、水の神を祭る安曇族、農耕、水を大切にしないのではなかろうか。

今年も10月10日は地区の秋祭りですので、祭典後には地域の昔のことを聞くことが出来る良い機会だと思っています。

そして11月29日には海の民の足跡をたどる海フォーラムがあり今年も米子が会場です。歴史家の先生の話、九州の志賀島歴史研究会、長野の安曇研究会、そして地元米子の会員等の報告を聞くことが出来るのでとても楽しみです。

正誤表
(誤) 27頁16~17行
玉垂山清見寺
十一面観音立像
人 (正) 玉垂山観音寺 (清見寺)
千手観音立像

杉谷 愛象

奇遇奇縁を感じていよよ 子市伯耆国文化創造計画のよなごの宝88選事業で、地域の宝や原石を求めて市内外を訪ね歩き、地元ならではの話や思わぬ展開を楽しんでいます。今回の企画にあたり、三人の方々(故人)を思い浮かべました。

まずは、美柑義正氏。孝霊山麓の大山町宮内に育ち、教職の後、町誌編纂や文化財保護委員等を務められました。景行天皇、孝霊天皇を祀り、奇祭・ウワナリ神事で知られる高杉神社や古墳の案内はもとより、伝承や事物についての話は熱いものでした。

つぎに、横川良治氏。やはり大山町長田に暮らし、郵便局長を務める傍ら郷土史研究に邁進。著作は貴重な基礎資料となっています。今の妻木晩田遺跡の住居跡群や彫刻石、朝妻伝承などの話を聞き、玉垂山清見寺の秘仏・十一面観音立像の調査にも随伴させていただきました。温厚・堅実なお人柄は定評がありました。

そして、船越元四郎氏。郷土史研究の先駆者にして重鎮。戦後の「伯耆文化研究会」設立はもとより、米子市文化財保護審議会代表、米子市史編纂委員長などを歴任されました。おこがましい限りですが勝手に「わが恩師」としていています。先生は常々おっしゃっていました。「加茂川と法勝寺川水系の辺りは、安曇郷や進長者伝説、宗形神社、高良神社など祭神も他所とは異なり面白く不思議なところ」。暮らしと信仰、水との関わり、コウラ〈カハラ〉神のことなどを論されるがごとく拝聴しました。

何気なく伺っておりましたが、今回、想いと情景が一つの環となりました。促されるように志賀島に赴き、大宰府の竈門山寺や久留米市の高良山も望み、大山や孝霊山、美保湾の景色を重ねました。

さらに発見がありました。橋本の阿陀萱神社には地元榎原出身の画家・志士である古曳盤谷が奉納した天井絵があります。出郷に際して想いを託した「龍之図」です。松代で佐久間象山と意気投合し、信州・松本に住んで家塾を開いて多くの人材を育てました。元治元年(1864)、象山遭難時の護衛に当たった飯沼泰之助(穂嶺)、安曇教育の基礎をつくり県政会で活躍した藤森寿平(桂谷)は共に南安曇郡出身の門人です。阿陀萱神社を通して信州・安曇野が

つながりました。気付いてみれば、米子市では10数年来、第2代米子城主・加藤氏の家臣中江藤樹の縁から、伊予の大洲と近江の安曇川との交流を続けておりました。

時代を問わず、要因さまざまに人は動き、事物も志も伝わる。歴史にロマンがあるとしたら過去のみにあるのではなく、共感する意識と行為の過程の中にあると感じています。粋な計らいは天か人か。研究も景色も昨日とひと味がう縁となることを期待しています。

古代海人族に寄せる想い

中村栄嗣郎

妻木晩田遺跡で日本海を一望のもとに眺めることの出来る洞ノ原に立つと、眼下に淀江の町と平野が広がっている。古代この地は湖沼であった。6千年前の縄文時代に海が内陸に深く入り込んでいたのが、弥生時代に海面が下がり海であったところが、湖沼として残った。丁度この前後に大陸から船を使って渡来してきた人々を、海人族という。当時の交通手段は船である。決して人の足でもなければ馬でもない。船を使って海人族は大陸の文化や稲栽培・鉄を日本（当時は倭国）にもたらした。紀元前後に半島の南部に小国家が形成され、半島の楽浪郡に朝貢するものが現れる。縄文海進から弥生時代の海退に伴い、多くの湖沼が残った。これ等の泥沼地・湿地帯を開拓していったのが海人と呼ばれる早くからの渡来人達である。日本の各地で国土の開拓に活躍した海人族は、稲種を運ぶとともに金属精錬の技術も伝えた。出雲神話に登場するスサノウ命は鉄と深く関わっていると聞く。彼等は列島を開拓し、漁労だけでなく米と鉄の文化が歴史を変えた。

渡来人達の祀る神は『記・紀』で神話化され、同時に力を蓄えた地方豪族達の祖神となっていく。この集団の代表的なものが海部氏族である。海人族とその神には、安曇族、宗像族、大山祇神を祀る大三島の海人、住吉族（筒男命神）などがある。米子にも上安曇・下安曇の地名や延喜式にも登場する古い宗形神社が存在する。古代海人族とのつながりがどうであったのか、多くの謎に包まれた歴史の闇に今回の「海人フォーラム」がどんな答えを出してくれるのか、楽しみである。

フェスタ開催の経緯

八尾 正己

この度、多くの皆様のご支援を頂き、米子の地に於いて「海人フォーラム」を開催する運びとなりましたが、此処に至った経緯などを簡単に記させて頂きたいと思います。

平成23年5月、私が作っていた稚拙な古代史のホームページに目を留めて下さった龍鳳書房酒井春人社長より突然の連絡を頂きました。長野県で開催される「安曇族研究会」への参加お誘いの内容でした。当然のことながら門外漢の自分だけで著明な研究者の方々と同じ議論の場に立つことはあまりにも荷が重すぎました。そこで、この分野では当県の第一人者と言うべき坂田友宏氏、古代史の専門誌『東アジアの古代文化』の編集に10年以上携わり、水野祐氏や森浩一氏なども親交のあった黒田一正氏に声をかけたのですが、当初は良い返事を頂けませんでした。しかし、かねてから伯耆国の古代史は非常にミステリアスで奥深いものだと思っていた私は、酒井氏からのお誘いはそのことを県外の多くの人たちに知って頂くまたとない好機であると考えました。坂田氏、黒田氏の気持ちを酒井氏にお伝えすると、まずは自分が米子に赴き直にお二方と話をすると行って下さったのです。7月、酒井氏が長野から遠路を車でお越しになり、坂田氏、黒田氏を交えて海人族や古代史の話で盛り上がりました。おそらく酒井氏のひた向きの情熱が両氏の本心にも火を付けて、参加を決心させたのだと思われます。その後坂田氏、黒田氏、私の3人で勉強会を始め、9月24日長野県安曇野市での研究会に参加致しました。

翌平成24年10月には志賀島歴史研究会の岡本顕実理事長より「金印シンポジウム」へのお誘いを頂きました。その際には米子市教育委員会杉谷愛象氏の参加も得て、4人で九州に赴きました。この時酒井氏、岡本氏からいつかは伯耆で研究会を開催して欲しいという、ある意味激励を頂戴致しました。

当時は4人で始めた古代史の勉強会、とても米子で主催することは無理であろうと思って居りました。主催の可否は別にして、伯耆国の古代史をもっと学問的に追求してみたいと考える賛同者も増え、坂田氏を会長として「伯耆の古代を考える会」が発足致しました。

島根県の出雲、岡山県の吉備には古代史に関する多くの著作が見受けられますが、伯耆国のそれは隣県のそれに比べると甚だ貧弱な感が否めません。これは伯耆国には記載に値すべき歴史がなかったかのような誤解を生じかねません。しかし調べれば調べるほど、伯耆国の古代史は相当に深遠であるという思いに駆られます。紙面の都合上列挙出来ない事は誠に残念ですが、海人族と伯耆国の鉄、考古資料、あるいは墓制などの民俗学的資料など枚挙すればきりがありません。

郷土への愛着、誇りというものは、そこにある美しい自然だけではなく、先人が築いてくれた足跡に基づくものであると確信して居ります。過去を知り、今を考え、未来を想う。この様な気持ちを持って勉強会を続け、そして今回多くの皆様の御支援・御指導を頂戴し米子の地で「海人フォーラム」を開催する機会を得ることが出来ました。本会が今後の伯耆国の古代史研究に興味を持って頂く契機となればと願うものです。

MEMO

広告・協賛への御礼

当フォーラムは多くの方々のご理解とご協力により、実現しました。改めて、ここに御礼を申し上げます。以下、協賛をいただいたの方々のご芳名と広告を掲載させていただき、感謝の意に代えさせていただきます。



海人フォーラムを応援します

私たちの住む上安曇・下安曇は、古代においては会見郡安曇郷と呼ばれた地域です。おそらくは、九州のアヅミ族の移住という歴史があったと思われます。この地域には大亀塚古墳など重要な遺跡も密集しているのも注目されます。

今回の海人フォーラムを契機に、この地域の歴史研究が深まっていくことを期待しています。

大塚宏征様・大塚典子様・香田貴子様・香田真弓様・田子宏典様・持田誠様・持田利枝様・持田徹哉様
(以上、上安曇・下安曇在住)

また県民の方々からも応援をいただいています

柏木徹様・黒田喬之様・濱崎賦光子様

木村宏二様・中田文人様

押村直行様

香田美子様

明星武様・岩佐武彦様・岩田茂様・岡村吉彦様・岡本豊様・櫻村賢二様・川越博行様・喜多村正様

篠田健三様・島根半島四十二浦巡りの再発見研究会・鷺見英之様・谷本八重子様・寺本静治様

鶴理恵子様・永井猛様・南條芳浩様・長谷川周一様・長谷川正吉様・中村栄嗣郎様・浜田幸夫様

播間匡広様・播間和穂様・播間由美子様・福原則昭様・前田昇様・松崎安子様・山藤良治様

山本恭子様・吉田登志子様・和田嘉宥様・匿名希望者5名

安井興業

建築板金

代表 安井宣晴

〒683-0805 米子市西福原2丁目6-61

TEL 0859-34-1823 FAX 0859-24-3148 携帯 090-4805-8462



BAYSIDE square

皆生ホテル

〒683-0001

鳥取県米子市皆生温泉4-21-1

TEL 0859-35-0001

有限会社

桜井歯科商会

米子店

〒683-0802

鳥取県米子市東福原5丁目6-43



cakoiinc@hotmail.com

CALIFORNIA KOI FARMS INC.

TAKEMI ADACHI

PRESIDENT

3360 GIRD RD.
FALLBROOK, CALIFORNIA
92028 U.S.A
TEL (760) 728-1483

JAPAN OFFICE
ADACHI TRADING LTD.
880 INDA-CHO YONAGO-SHI
TOTTORI-KEN, JAPAN.
TEL.0859-22-6776
FAX.0859-23-2566



延喜式内社 宗形神社

- 鎮座地 米子市宗像298
- 御祭神 多紀理比賣神・多岐津比賣神・市杵島比賣神
- 宮司 内藤 博文
- 由来 昔、当社の御祭神が海路にて長田の地に御来着、その後、隣接する宗像の地に鎮座されたという。御着船された地は今も船塚と称し、御船は石になったという。

伯耆文化研究会

伯耆の文化の形成を、歴史学・民俗学・考古学など幅広い視点から探求しています。
その成果は、年1回発行の『伯耆文化研究』で発表しています。

伯耆文化研究

第13号

—目次—

明治六年会見郡血税一徳の問いかけたもの……………	国田 豊 (1)
大山寺領に大鍛冶打込……………	影山 猛 (11)
美保飛行場周辺の戦争遺跡 —塊体塚を中心として—……………	藤田 達三 (17)
鳥取県の明治前期における新道建設と交通事情……………	岩佐 武彦 (34)
大山の植物 ~今と昔~……………	鷲見 寛幸 (50)
因幡二十士関係文書 (十二) —「新編隊記録」③—……………	岡田 幸正 (58)
伯耆国および他の令制国の式内社に関する 推計統計学的考察……………	八尾 正己 (86)

2012

伯耆文化研究会



中国地方最古級（10世紀）女神像

八幡神社

- 鎮座地 米子市東八幡293番地
- 宮 司 内藤和比古
- 御祭神 譽田別尊・氣長足姫尊・足仲彦尊・
素盞鳴尊・高良尊・物部大連神
- 由 来 創建は不明ながら、棟札などから平安後期には成
立していました。『和名抄』に記された会見郷、お
よび巨勢郷の地に成立した相見庄の鎮守であり、
神職は紀氏の流れをくむ巨勢氏、後の相見氏が務
め、天正17年（1589）に内藤氏に受け継がれました。

Ac 有限会社 **アダック**
Adack アダック建築設計事務所

ハウジングプロデュース
建築設計・施工

取締役 **足立好郎**
一級建築士 一級技能士

〒692-0007 島根県安来市荒島町 3502-12
TEL 0854-28-8566 FAX0854-28-6637
携 帯 090-2297-5891
アドレス adack@alto.ocn.ne.jp

E **E** 歯科 **E DENTAL CLINIC**
クリニック

〒689-4121 西伯郡伯耆町大殿1020-6 ☎0859-68-6001



どい歯科クリニック

〒689-3425 米子市淀江町佐陀2135-5
☎ 0859-56-1600

和傘工房 初音

和傘製作、修理、レンタル

URL :
<http://hatsune-wagasa.jp>

E-Mail :
info@hatsune-wagasa.jp

電話 090-4146-9434



延喜式内社 大神山神社



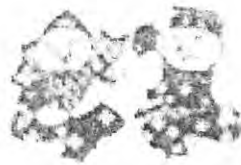
- 鎮座地 米子市尾高1025
- 御祭神 大己貴神・大山津見神・須佐之男神・少名毘古那神
- 由来 国引き神話に「火神岳」として記録される大山は、まさに神宿る山であった。この山を遥拝する祭祀地は、元は伯耆町の丸山にあったが、点々と移動し、現在地に鎮座した。大山寺には奥宮=夏宮が鎮座する。



総合保険アドバイザー

(有)エーエージェント

米子市旗ヶ崎7丁目1-29
TEL(0859)24-8020
FAX(0859)24-8021



海潮園

〒683-0001 鳥取県米子市皆生温泉3-3-3 TEL 0859-22-2263



コミュニケーションデンタルユニット

precia

プレシア

●ユニット部 販売名:プレシア 医療機器認証番号:224ACBZX00054000
●チェア部 販売名:プレシア チェア 製造販売届出番号:27B1X00042001034
管理医療機器・特定保守管理医療機器 一般医療機器・特定保守管理医療機器

◎仕様・デザインは、予告なく変更される場合がありますのでご了承ください。
◎カタログ・資料の請求は、右記ホームページでも受け付けております。



■詳しくは、<http://www.takara-dental.jp>へ

 タカラベルモント株式会社

岡山営業所 TEL.(086)233-8825
〒700-0921 岡山市北区東古松3-13-11

広島営業所 TEL.(082)278-2411
〒733-0833 広島市西区商工センター4-11-8
タカラスペースデザイン(株) TEL.(082)278-0400

地方出版に 33 年 / 郷土の歴史や人物を訪ね歩いた編集者人生半世紀！

立花書院の本

《在庫リスト》

- 後醍醐天皇の道／1,748円 ◇各地に残る隠岐の島配流への伝説地を写真と解説でたどる
- 香取村(開拓五十周年写真集)／2,857円 ◇満州開拓→苦難の引上げ→
香取への入植の歴史を写真でたどる
- 日野川の伝説(再販)／1,429円 ◇清流日野川の各地に残る河童伝説
- 漫画 日野川の河童／1,000円 ◇日野川沿いの光明寺には法力のある名物和尚さんがいた
- 日野川今昔写真集／5,000円 ◇明治、大正、昭和の写真には各地に現存しない光景がある
- 伯耆札所のころ(法話集)／1,000円 ◇伯耆札所の住職たちが語る
- 伯耆米子城(改版)／1,500円 ◇かつては山陰一の美城とたたえられた悲劇の城の歴史
- 大山の民話(初版)／1,429円 ◇僧兵数3000、僧坊がいらかを連ねた大山各地の民話
- 中海の民話／1,429円
- 中海の怪談／1,429円
- 香取分校六十年／1,429円 ◇みかん箱の机、教科書も無い学校から六十年経って……
- 大山今昔写真集／3,000円 ◇明治、大正、昭和、平成の写真には今は無い貴重な光景が
- 亀井茲矩(第二版)／1,500円 ◇賢君といわれた鹿野城主亀井茲矩公は山中鹿之助の義兄弟
- 中海 狐たちの伝説／1,500円 ◇中海周辺の稲荷神社を訪ね歩き、狐伝説を追った
- 漫画「我が友植村直己」(第二版)／1,300円 ◇廣江研著の原作を元に漫画化。
親友ならではの植村像

これらの本は、島根、鳥取両県内主要書店で販売中

立花書院 〒 689-3545 米子市吉岡65-31
☎ (0859) 27-4894 FAX (0859) 36-9190



龍鳳書房古代史関連書籍

〒381-2243 長野市稲里1-5-1 北沢ビル
TEL.026(285)9701 FAX.026(285)9703
E-mail info@ryuhoshobo.co.jp

亀山 勝著 古代史ワールド

安曇族と徐福

弥生時代を創りあげた人たち

紀元前5世紀、中国春秋時代の呉国の人々が持つ渡海技術は、日本に弥生文化をもたらした。科学的視点での考察がこれまでの日本古代史の定説をことごとく覆す。

四六判 定価2052円

安曇族と住吉の神

綿津見神と同時に誕生した筒之男神とは何か！ その神は古代日本でどんな役割を担ったのか。各地の住吉神社を調べ、その結果日本古代の防衛策にたどりつく。亀山古代史ワールド第二弾

四六判 定価2484円

龍鳳ブックレット

弥生時代を拓いた安曇族

安曇族入門書。いつの時代に、彼らはどのようにして、なぜ日本にやってきたのか。安曇族の誕生とその活動を誰にでもわかりやすく解説。

四六判 定価1080円

安曇族研究会誌

古代海人族研究

創刊号

安曇族研究会待望の会誌。安曇族・宗像族をはじめ古代海人族をさまざまな角度から説明する。

A5判 定価600円

中島信文著

「魏志倭人伝」の言葉の一つひとつを丹念に解説、「水行」の真の意味を明かす、ついに「邪馬台国」の所在地を突き止めた。これまでの考古学者、歴史学者たちの不毛な「邪馬台国」論争を痛烈に批判し、「魏志倭人伝」を正確に解説した衝撃の書。

目を覚ませ！ 歴史学・考古学よ

「魏志倭人伝」の言葉の一つひとつを丹念に解説、「水行」の真の意味を明かす、ついに「邪馬台国」の所在地を突き止めた。これまでの考古学者、歴史学者たちの不毛な「邪馬台国」論争を痛烈に批判し、「魏志倭人伝」を正確に解説した衝撃の書。

四六判 定価2100円

信濃の海人族の足跡

(龍鳳書房は長野市の出版社です)



穂高神社 式内社

鎮座地 長野県安曇野市穂高 6079
御祭神 穂高見命 (安曇氏の祖神)



諏訪大社 式内社

鎮座地 上社本宮 長野県諏訪市中洲宮山1
上社前宮 長野県茅野市宮川 2030
下社春宮 長野県諏訪郡下諏訪町 193
下社秋宮 長野県諏訪郡下諏訪町 5828
御祭神 建御名方命・八坂刀売神

やお歯科クリニック

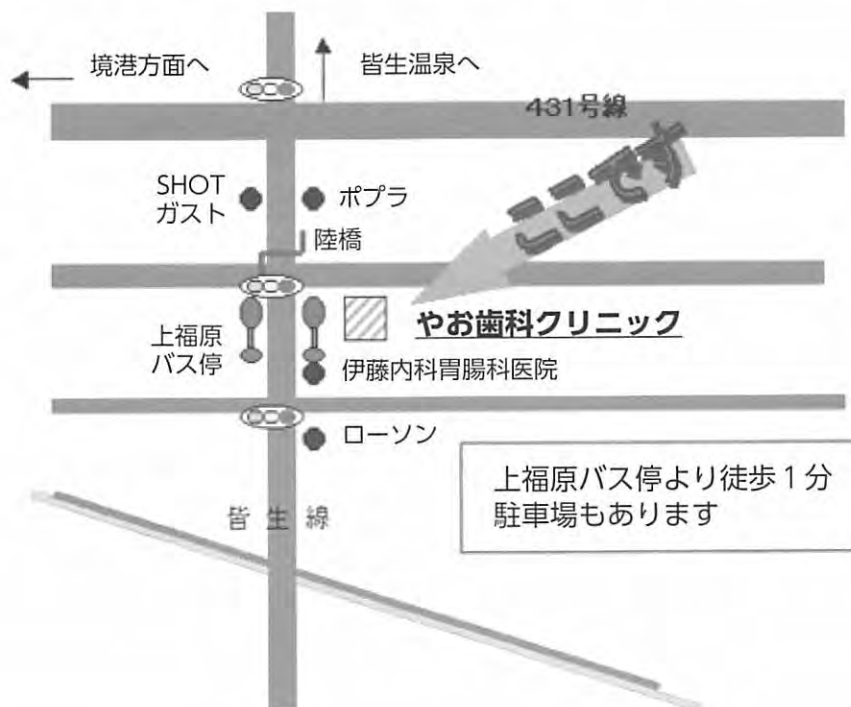
〒683-0004 米子市上福原 3-3-22

TEL 0859-23-5858

午 前

午 後

月曜日	9:00 ~ 12:30	14:30 ~ 18:30
火曜日	9:00 ~ 12:30	14:30 ~ 18:30
水曜日	9:00 ~ 12:30	14:30 ~ 18:30
木曜日	休 診	休 診
金曜日	9:00 ~ 12:30	14:30 ~ 18:30
土曜日	9:00 ~ 12:30	14:30 ~ 17:30



よなごキッズ.COM



URL : <http://www.yonago-kids.com>

「ファンタジー米子・山陰の古代史」

ファンタジー米子・山陰の古代史

Yahoo, Googleで「米子 古代史」と入力して検索
してみてください。

あるいは <http://houkiyonago-kodaisi.com/>

古代出雲こそ大和朝廷の母体であった



大和朝廷成立の謎

— 古代出雲王国から邪馬台国へ —

●渡部雅史 著 ●幻冬舎ルネッサンス 発行 ●定価 1296 円 ●四六判 168 頁

大化の改新の際、天皇家の外戚となる資格のなかった藤原氏がスサノオの尊の子孫であり、外戚となる資格のあった蘇我氏を滅ぼし、大和朝廷の実権を篡奪した。これを隠すために日本書紀は編纂されたのだ！さらに倭人伝から「旅程距離5倍の法則」「長距離旅程は方位が南の法則」などを導き出し、景初三年当時の邪馬台国の所在地を明らかにしている。

ADLデンタル

〒689-1211 鳥取市用瀬町別府199の2

代表 安東 重次



TeethCareLab

TAKA DENTAL CLINIC
タカデンタルクリニック

〒683-0064

鳥取県米子市道笑町4丁目87番1

TEL 0859-39-0606

<http://www.takadc.jp>

伯耆の古代を考える会 会員募集

このフォーラムを主催した「伯耆の古代を考える会」では、古代に興味のある方の参加を歓迎します。月1回の勉強会を開き、また現地探訪会も企画していきます。さらに伯耆の古代に関するブックレットなども刊行していきたいと考えています。どうかご参加ください。

【連絡先】 伯耆の古代を考える会

〒683-0066 米子市日野町187 黒田方 ☎0859-22-2304

国づくりの神、オオナムチ神とスクナヒコナ神の伝説が伝わる……



赤猪岩神社

オオナムチ命の遭難の地に鎮座する。

近隣には三角縁神獸鏡が出土した普段寺古墳群や伯耆最大の規模の三崎殿山古墳などが点在する。



粟嶋神社

伯耆国風土記逸文には、粟の穂に弾かれて常世の国へ去ったスクナヒコナ命の神話が記録されている。また美保の海でオオナムチ命と国づくりをしたともいう……。

神話の国・伯耆

九州と吉備の文化が交錯する伝説を語る……



楽々福神社 (日南町宮内)

日南町から米子周辺まで、日野川の流域に点々と鎮座する楽々福神社には、孝霊天皇や吉備津彦など吉備系の神々の鬼退治の伝説が伝わり、たたら製鉄と関連する神社とされる。上安曇にも鎮座する。



高杉神社

孝霊山の麓、宮内の集落に鎮座する。祭神は九州の高良神社と同じ景行天皇と吉備系の孝霊天皇を祀る。この地になぜ、九州系と吉備系の神が重なるのか。神社の背後には宮内古墳群があり、古墳と神社の関係が注目される。

あなたの郷土の歴史を本にして残しませんか……

編集工房 遊

〒683-0066 米子市日野町 187 電話 0859-22-2304

上淀白鳳の丘展示館



(古代寺院の金銅内部の原寸大復元)

— よみがえる白鳳寺院 —

上淀白鳳の丘展示館

米子市淀江町福岡 977-2 TEL&FAX 0859(56)2271

開館時間 9:30～18:00

休館日 毎週火曜日・祝日の翌日・年末年始

入館料 一般 310円 高大学生 160円 団体 (15名以上) 1名につき 60円引き

Rodan
DENTAL LABORATORY

代表 小村 崇 takashi komura

ロダン デンタル ラボラトリー

〒683-0845 米子市旗ヶ崎 2丁目 10-8

TEL&FAX. 0859-23-1221

E-mail: rodan@rose.plala.or.jp



REGAL SHOES

Heartful Shop

REGAL SHOES 米子店

〒683-0805

米子市西福原 2-1-10 米子しんまち3F

TEL0859-22-4192



Nakaso

中曽産科婦人科医院

米子市西福原4-8-41 22-5360

書きためた
原稿を本にしてみたい

自伝を本に
してみたい

撮りためた
写真で作品集
を作りたい



本づくり、しませんか？

自費出版のススメ

原稿の書き方、編集、見積など自費出版に関するご質問・ご相談を承ります。
どうぞお気軽にご相談下さい。

今井出版の本 — 今、山陰の歴史があつい!! —



B5判 264頁
本体価格 1,852円+税

出雲国風土記を、わかりやすく紹介し入門書に最適。



A4判 246頁
本体価格 1,667円+税

最新の調査結果から新たな出雲古代史像を解き明かす。



A4判 168頁
本体価格 1,905円+税

山陰両県の神社と神話の関わりを詳しく紹介した一冊。



A5判 192頁
本体価格 1,714円+税

夜の暗闇の中に見えそうで見えない神々の世界が浮かんでくる。

第二回 古代歴史文化賞
しまね賞受賞



A4判 200頁
本体価格 2,381円+税

写真家 古川誠氏により、古代出雲の原風景が今、写し出される。



A4判 126頁
本体価格 1,300円+税

出雲国浮浪山鰐淵寺の歴史を、関係する文化財を通して見ていく。



A4判 174頁
本体価格 3,500円+税

貴重な80余点の資料を豊富なカラー写真付きで解説。

2015年2月発刊予定!!



B5判 174頁
予価 1,800円+税
山陰の神々待望の第2弾!

※表紙デザインはイメージです。

お問い合わせ

今井書店グループ

今井印刷株式会社 TEL 0859-28-5551 FAX 0859-48-2058

〒683-0103 鳥取県米子市富益町8 E-mail: imaibp@imaibp.co.jp

今井印刷

検索



あま
海人フォーラムin米子

古代日本海の文化交流

—— 九州・山陰・北陸・信濃を結ぶもの ——

2014年11月29日(土)

10:10～16:40

会場 米子コンベンションセンター 小ホール

主催／伯耆の古代を考える会

共催／志賀島歴史研究会(福岡市)・安曇族研究会(長野県)・伯耆文化研究会・
よなごの宝88選実行委員会・むきばんだ応援団・社ガール・山陰万葉を歩く会

後援／米子市・米子市教育委員会・境港市・南部町・伯耆町・大山町・日野町・
日南町・日吉津村